標註枕草紙讀本

四

特別
イ 4
3163
214(4)

貴
14
3163
214(4)

標註枕草紙讀本目次

巻四

圓融院　一丁
徒然なる物　三
徒然慰さむる物　三
とり處ふき物　四
猶世ふめでたき物　四
少將といひける人　六
八幡の臨時祭　七
下ゆく水　七
桃の若枝　十二
双六うつ所　十三
碁うつ所　十三
おそろしき物　十四
清しと見ゆる物　十四
きたなげなる物　十四
いみじげなる物　十四
胸つぶるゝ物　十五
うつくしき物　十五
人ばえもする物　十七
名恐ろしき物　十七
文字こゝろしき物　十八
むつゝしげなる物　十八
えせ物の所うる折　十八
苦しげなる物　十九
うらやましき物　十九
とくゆらしき物　廿一
心もとなき物　廿二
官のつゝうさ　廿三

人間の四月　廿五
昔覺えて不用なる物　三十一
遠くて近き物　三十一
やどりのつらさの權の守　三十二
宮づかへ人の里　三十三
すびつの煙　三十六
ちたりかほなる物　四十三
嶋ハ　四十八
寺ハ　四十八
佛ハ　四十九
陀羅尼ハ　五十
過たる事忘れぬ人　廿六
賴もしげなき物　三十一
井ハ　三十二
大夫ハ　三十三
雪何の山ろ　三十五
ともあきらの王　三十七
風ハ　四十五
濱ハ　四十八
經ハ　四十九
物語ハ　四十九
讀經ハ　五十
うちふし　廿九
近くて遠き物　三十一
受領ハ　三十二
女の一人すむ家　三十三
雪月花の時　三十六
ふひまるり　三十七
心よくき物　四十七
浦ハ　四十八
文ハ　四十九
野ハ　四十九
あそびハ　五十
舞ハ　五十
笛ハ　五十
夕すゞみ　五十五
月あらき夜　五十六
人の家ふつぎくしき物　五十七
わびしげなる車　五十八
ゆげひのもけ　六十
硯　六十二
驛ハ　六十四
ふる物ハ　六十八
星ハ　六十九
引物ハ　五十
見る物ハ　五十一
五日の菖蒲　五十六
たき物　五十六
大きなるき物　五十六
清げなるをのこ童　五十七
大ゲさ　六十
成信の中將　六十一
大藏卿　六十二
あうふり給へ　六十三
文といふ物　六十四
岡ハ　六十四
社ハ　六十五
日ハ　六十八
月ハ　六十八
雲ハ　六十九
ちらべハ　五十
夏の山里　五十五
たき物　五十六
短くてありぬべき物　五十七
行幸　五十八
あをざ〳〵　六十
大藏卿　六十一
文といふ物　六十四
社ハ　六十五
月ハ　六十八

標注枕草紙讀本卷四

佐々木弘綱標註

百十三段

圓融院

圓融院の御ときの年、ふる人は服ぬぎなどして、あらたまるべきことをおかやけのうちにてはじめて、院も人も、花の衣ふるといひ、ひゝなん世の中事なるべき思ひ出るふ、雨いとうふる日、藤三位のつぼねふみの中のやうなるわらはの、大きなる木の白きふ、にて文をつけて、これ奉らんといひ、ひゝなればいづこにぞ、今日明日は物忌なればはたとゝもまゐぬぞとて、おもはたてるをとゝみのかゝよ

圓融院は、一條帝の御父帝にて、正暦二年二月十三日に崩し給へり。御ゝては御一周忌の事なり。花の衣は、仁明帝の御崩遊て、人々叙壽などせし時、遍昭の曾人は花の衣は成りぬるを苔の袂よかわきなんせよとよまれしをいへるなり。

藤三位は、一條院の御乳母のよし後拾遺集の詞書に見ゆ。

かみは長押の上なるをいふ。巻数は信景曰たとへは大般若経一部仁王経百巻なと読誦したる巻数の目録なるをいふ。胡桃色は表は香色裏は白き紙を云。

うれをうるの歌は僚院のよませ給ふ。

椎柴の袖は喪服を云。八雲御抄は四位の袍也と記されたるはたがへり。

りうりいまてさうるんとてきるせうてまつらず。物いみうれバえ見ずとて。かみはついさうしておきうるをほとめて手あらひて其巻数とこひて。ふしをがみてあけうれバくるみ色といふ志きしめあつごえうたるをあやしと見てあけもてゆけば。老法師のいみじげなる手にて。

うれをぶふうくみとおもふは都にも。

紫ぐんやきつるもひもどの袖。

とかきたりあきまうくねいうりくるわざうな。たれがきうるふうあうんに和寺の僧正のまやと思へどもかうることのいまだ行はれる

藤大納言は四融院の別當なれと誰とも考へ得ず。

恐しういひたるは陰陽師をとめいとくつゝしむへしと勘へ云たるをつふ。

それを二つなるは椎柴の袖の歌と藤大納言の返事と二つを持て藤三位の参内せしせ。

らん。藤大納言ぞ。かの院の別當なれはせしかば。其ちとまへる事なめり。これをうへのはまへ家るどふとうきこうめさせでやとおもふに。いと心もとなくれど。猶おそろしういひたる物忌を志そてむとわんどうてまゐはとわて藤大納言のはもとに。此はかへしをもてきうはせたきバずるをもて又返事志てはうせめりうう。それをふくうるゞうとりていそぎまゐりて。かうる事うん待りしとうへもおそうまゐはまへて語り申めふを宮いいとはれるくはらんじて。藤大納言の手はさまふいあうで。法師ふうて

妖わらうよ云こハ。其老法師の教ハ。妖怪ふ有しふ〳〵似たりとて。今一つ所厨あのもとよ有しを。帝の取出させ給ひしなり。

おほされよ。一本作せられよとあるを方。すきりきまよおほゆ。

頭いるやハ。手半と明らかうねて。心のおほく〳〵しくいふせきこと也。

鬼童ハ。赤よ蓑虫の

ゆうれとのたまふすれバ。ささらいふれが云わざふ。すきぐ〳〵ふきよ遠部信綱などを。誰ういあるそれ〳〵やかれよやるどれがめきゆうしがりゆふふうへ。妖わらうふ見えしふこそいいと〳〵似さめれとうち〳〵ふませ給ひて。今一すぢはしのもとよりけるをとり出させゆへれバ。いであ心うられおがきれよわるかしらいゝやいうできゝ待らんとゝぐせめふせめ申して恨みきこえて。笑ひゆふふ。やう〳〵おかせ〳〵を出て。はつうひふいきたりるおふ童ハ。だいと人所のとゞといふものゝもろりるをぶ兵

やうるると有し首尾より。美隆ハ。蓑虫を鬼の子といふ説有し故也といつり。引ゆるかしハ。引動かし也。后宮のつもるゝ顔よお給ひしをもて。藤之位のかこちまゝるゝせるさまなり。

ちこうりよハ自慢さうよの云うて。帝の御乳母なれハ也。

文取いれしハ。彼使の童ハ。是なりしかと。其文受取し藤之位の女房よ見られハなり。

閑ぎかるらひ出したるやありけんなどおほせられるれバ。宮ゆわらせゆふをひきゆるぐ〳〵奉りて。すぐかゝはのゝせおもゝます。狂うるぎひもるゝ。手をうち洗ひて伏をぐみ待りし事よと笑ひねるぐうるゆゆへるさまもいとおこりかふあいぎやうづきてをゝ〳〵さてうへのぎいを人所ふも笑ひのゝしりて。つぎねふおりて。妖をらハたづね出て。文とりいれ〳〵人ふ見をれバ。それふこそ待るめれといふ誰ぎ文をぶれがとらせしぞといへバ。志き〳〵とうち思みて。ともかくもいそぐそ〳〵ふ。藤大納言。後ふ聞て笑ひ

つれ〳〵ハ。静まさひ〳〵退屈するをいふ。
所さりなるハ。深くつゝしむ時。家をさり外まで物忌するを云。
うまおりぬハ。奴六月忌ふ月のおりぬを云へり。
物忌それとハ。物忌まで つゝしみあ外ふゝきたる人をとハ。いれぬわるんど。

興ある人なれハいいるゝとなり。
みそひめハ。御衣糯糠なり。衣をひめのりして張るハこハ。ません為なるゆぬれていとう所なるゆるべし。
あとび。濱に云跡火の義にて喪を送り出したる跡にて。たく故なれハなるべし。

興ある人なれハ

はれ〳〵するもの　百十四段

ところさりたる物いみ。うまおりぬすぐろく。除目まつかさえぬ人の家。雨うちふりたるハまゝてつれ〳〵なり。

つれ〳〵なるぐさむる物　百十五段

物がたり。碁。すごろく。三つよつぐるまるちごのもれをかしういみ。又いとちひさき児の物語したるゞ。魚みるどしたる。くゞ物。男ゆ打さるがひ。物よ〳〵いふゞきたるハ。物忌なれどいれつゝし。

とりどころなきもの　百十六段

かるちふぐげよ心あしきく。みそひめのぬきたるゞこれいみ〳〵うわろき事いひ〳〵るとよろづの人ふくむる事とていまとゞむべきよもあらず。又あとびれ火を〳〵とつゞ事なるどてら。世ふき事なるゝねバ。皆人ゝとり〳〵ゝんげふかきいで人の見るべき事ふいあ〳〵ねど。此さうしを見るべき物と思ふゞろしのバ。あやしき事をもぶくきをも。只思ふん事の限をこゝんとて有しも。

なほ安ふめでたき物　百十七段

あるんゞの祭乃れまゝバのり乃事ハ。何ごとふの

試楽ハ臨時祭の音楽をまつ試る心なて祭の前一両日なり行なる〜由雲図抄なみゆ。
掃部寮ハ戒原抄なり掌鋪設事云々と見ゆ。
信足ハ地下の楽人なり。
やくかひ濱臣云和名抄なる錦貝をなめりこ〜ハ貝なて作れる盃なるへしされハ女そ出て取けるとハ盃をとる也又下なおこほしとあるハ酒をこほしを云へる也。

ひ〜ん試楽もいとをかし春ハ空のけしきのどうふてうら〜とわうふ清涼殿の御前の庭ふかもりばうさぶ〜みどもをあきてはうひて北ねもてふ舞人ハ御前乃〜ふこ〜ハ〜ハひお事ものあん所の衆どもまいがさねどもとりてまへごとふとるれ〜べいおうも其日ハ御前ふ出入るぞ〜公卿殿上人ハかハる〜盃とりてぞてふもやく〜かひとふ物をのこなどのせんぞふうとてあるを御前ふ女ぞ出てとりけるぞ思ひうけどくをやあ〜んともおらぬふひ〜きを屋ようさ〜出て多〜ともらんとさわぐものも中々うちこぼ〜てあつうふ袍なようろらうふふとり出ぬるとものふハれくれてかく〜こきをさめどのふ火焼屋をおてとりいる〜こそをこ〜けれかんもりづくるの主ものたく〜みとるやおそきとどのもりづくる乃官人ども手ごとふたはきとりするごそ〜す承香殿の前のそどふ笛をふき〜てひやうしうちてあそぶをとく出こをんとまつふうどをまうくひて竹のませれもとにあゆみ出てみ琴うちたるそどなどいうふせんとぞれぞゆるや一の舞のいとうるそ〜く袖をあそせて二人そ〜り出て西なむうひて立ね。

れくれて一本おくれぬとあり。
をそめ殿ハ宜陽殿なあり。
承香殿の云々楽人舞人此殿の前なり。
呉竹の墓を経て清涼殿の前ふ出るさまをへる也。
うと濱ハ駿河舞のうたひ物の名也。

半臂の緒云々ハ陪従のさまなり。あやもるき拔ル聲のあやのかるきせとみえ濱ハあやもなきこま山とつゝ歌曲の名なりへしといへり。

御琴弾返〻て以下ハ退出のさまなるへし。

いでハ俗よいヤハヤモウとつゝよひつゝき詞なり。

加茂臨時祭ハ字多帝の寛平年中よ始まりて十一月下酉日ゆ行なる。

寒く〻え氷りてハ霜月の事なれハせうちたるきぬハ見る人の衣裳なり。オの男ともやしてハ解べき時刻なれて人長坐をたちてオの男ともをつ

つぎ〻出るあ〻ぶみをひやうしみあハせてハたんひの緒つくろひうぶりきぬのくびるどはくろひてあやもるきこま山るどうゝひてきひ〻ちゝるゝいをべていみじくめでゝだゝひれるどもふハ日一日見るともあくまじきをもてぬるこそいと口をしけれどもゝあるべしと思ふハゝのもきふみこととうきかへして。此〻びやゞて竹のうゝろ〻まひ出て。ぬぎゝれつるさまどものるまめゝしさハいみじくこそなをゝいわりのトがきねるどみぐれあひてこるゝるゝふわたりるどゝさゝいで更ふいへバよのほ祝也此〻びハ又もあるまじくれバふやいみじくこそてふん事ハ口をしけれ上達部なるどもはゞきて出のひぬれバいとさうぐしう口をしきよ賀茂の臨下の祭ハかへりぎちれ御ゝぐしらるどふこそなぐさめらるれ庭火のけぶりの細うのぶりゝるふかぐらの笛のおもしろうわるるき細う吹ともきゝるふ寿の聲もいとあそんれふいみじくおもしろくさむくさえ氷りてうちゝるきぬもいとつめゝゝ扇もる手ひゆるもおぶえだオのをのこどもめしてとびきゝるも人長の心よげさるどこそいみ

て舞をしひたるう。里なる時ハ清少のいまゝ宮つかへせさうし時を云。

たゞわらうるをハ里人ハ御前の後るゝハ見る事うれしハねハ。使舞人なるとの又路をわらうゆくを見て猶あかをして賀茂まで行てみるとうゝ。

けゝの板ハ賀茂の橋なり。

少将と云々上のつゝきまて舞人ゑ出し人のなくるうし事をいへるなり。

しゝれ里なるときいたゞわらうるを見るふあゝねで御やしろまで行て見る折もあり。大きなる木のもとゑ事〳〵てたれハ。松の煙〳〵ふびきて火けゝのげふそんひの緒きぬのはやもひるうりハこゑるくまさりて見ゆ。ゆ〳〵の板をふゝるうちしつ〳〵声あハせてまふゑどもいとをのしきふ。水のるゞる〳〵音笛の声などのあひゝるハ。まことゑふ神もうれ〳〵とおぼ〳〵めもゝんゝし。

少将といひける人　百十八段

少将といひるる人の年ごゝふまひ人ゝてめでたきもゝゑ思ひ出みるるふるくふりて。ゑの御かみの御やしろハ。上賀茂の御社を云。

八幡法時祭ハ。朱雀院の御時ゝ始まれり。

さ〳〵ばハ。かへり之のあ〳〵ばなり。うへハ。一条院を申たてまつる。

やしろの一乃橋ゝもとふあるをきゝけバ。ゆゝもう。せちふ物おもひいまでとたもくゞ猶此めでたき事をこそ。更ゑ見えなもひもつまゝ〳〵れ。

八幡の臨時祭　百十九段

やゝ〳〵このまんゞのまつりの名殘こそ。いとはれづきまれるゞどてゝくりて又まふわざをせざりゝん。さらばをゝのしかゝまゝ〳〵ろくをえてうしろまりまゝづるこそ口をゝ〳〵れるゞどいふをうへの御まへふきこゝめして。明日かへりゝゝんめしてまゝせんゝるゞどおゝせらるゝ。まことふやさぶ〳〵ふらんゝさゝふばいゝふめでゝこゝんゝるゞ申

さ〜もやあ〜さらん八例なき事ハさうもあるまじきと出ひさゆさ沈〜まとなり。

ねるあくるもなうハいと〜うるさひて。そ〜〜とさるくさまなり。

衆をうしらにうちうづきてハ女房ちのあるそくのぼるさまなり。

故殿ハ皇后定子の父中関白道隆公也。

すうれしげりて宮の御布ども猶それまこせさせぬくと。おつまりうて申しまどひしらバ其たびのへりてまい〜ハ嬉しうし物うれさ〜もやあらざ〜んと。うちさゆみつるにまひくまくふめすをきくつけさる心地物ふあ〜るぞのりさわぐも。いと物ぐるおしく。志もにある人々まどひのぼるさまこそ。人のずさ殿上人すどの見るらんも志〜ず。裳をかし〜らふうちかづきてのぞるをわらふもうとわりるり。

下ゆく水　百廿段

故殿などおそ〜申すきで。世の中ふこと出き。物さ

何ともなく〜うとてありしかバ。その比淑堂殿へ侍の心さ〜ありるど談せし者のあれバ。久〜〜后宮へ〜〜うりて出仕せざりしこ。左中将ハ斉信々なるべし。

黄ばた葉。紫苑。萩などいづまも衣服の色おひをいつり。

わゞしく成て。宮又うちふもい〜せぬいず。ふニ条といふ所よおハ〜ますふ。何ともなく〜うとてあア〜うバ。久ろう里ふあ〜う。活まへわ〜うおぼつゝなさふぞ。猶えゝ〜てハあるすゞうける。左中将れい〜て物語志ぬふ。今日ハ宮ふまあり〜れバ。いみゞく物こそあいれるりつれ。女房けさうぞく。裳ゝきぬるどのをりふあひたゆまずをのしうてもさ〜ふかなみものそゞれあきたるすり見いれつきバ。八九人バうりあて。黄ろちバの唐衣。うは色の裳。志をん萩などをのしうあるみさるうる。御前の草ばいと高きをる

ことさらぶりぶりとはいはぬしとりふるる事ぶりどもなり。

ゆうしゅいやなる事をれどこゝはつらくゆふとゆふこゝろなり。

ろくゐは仁寿殿の遣と白張すれどこゝはたゝ屋根のふき廊下を云

どゝこれい志ゞうて侍るゞこゝいせてこそといひつれば露おうせて清らんぜんとてゞとゝろゝふと宰相の君の声すてゝ〳〵へつるなりをうゝをなかえつるのふ清墨居いと心うしゆゝる所まをすひせさせぬそんゐどいいこゝぞき事あるともゝ必さふゝふべき物ふおゞしめされるものひもゝるゝるゞどあゝるいひつるゝりきこのせ奉れとゐめりうしゝおりて見給へおいれげなる所のさまうなろゝいの前ふうゐられるうけるゞうゝんのゝうらめきをゝ〳〵き事るゞどのたまふいさくのふくゝしと思ひゝうしゝばゝみゝ

おゝゝゝいゝ光らうるゝ事るゝれるゝゆうの云うれどこいはれおやうるゝ云うり。

たゝ殿ふたろ長遣長云うり。

人ゐるまゞらるゝそふ遣長云の人ゐ縁おゞるゞゝ清ゐを縁する者のさゝゝ。

字のへんふ左字のゐあゝうるふるり。

をさゐふ下つゝんのゐなり。

ゝ待りしゝばとゝいらへきこゆおいらゝみとて笑ひゐふげみいゐのゐらんと思ひまゐゝる御ゝきみをゐゝゞゞさゞゝふくたちのゞたの大殿のうゝれ人志るゞゞちゐてありゐどさゝゐさゝつどひてゝのゝゞどいゝみ志をゝりゐるを見ていひやみゝをゐちゝてゝるゝるゐみ見ゝゝふゝふゝればゝゐまゐゞどゐゝゝびの作をゝ遣ゝてゞげみゝ久志ゝうゐりみゝるを宮のへんみふゝたゞあれゝゞゝるみゐゝてゝゝごとゞどゞくべゝきいゝゝずゝ作言ゞどもゝくゝて日ごろみあれば心ゞゝくゝてうちゞどのむゝゐどみゝをゝあ

くゝりてさへハ后
宮ハ諸人の前をた
がして清少への
文と思ひなせる人る
ま長女清少のかた
までも忍ぶとなり。
山吹の花びらハ。山
吹ハ口なし色なれ
バいはで思ふとい
ふ意なり。
すぐ知る様ハ。清少
が皇后の御消息を
見て感涙をこぼす
を云。古今集の哥の
中の心をもつゝき
も告げなくみなすぐ
知るものハ。洞なり
なりとあるをとられ

文をとりてまゐらする。御まへより左京の君して忍
びてたまはせたりつるといひて。こゝにてさへひ
き忍ぶもあまりなり。人づてのおほせ事にて
あらぬなめりと。むねつぶれてあけたれば。紙に
はものもかゝせたまはず。山吹の花びらを只一つ包
ませたまへり。それに。いはでおもふぞとかゝせたまへ
るを見るも。いみじう。日ごろのたえま。なげ
かれつる心を慰てうれしきにふすゞるさま
をさめもうちまもりて。御前にハいつのよ折のを
りごとにおぼし出聞えさせたまふなる物をとて。
たれもあやしき御ながゐとのみこそ侍るめれ。

る也。抄にまうでん紛
らるさまとあるハ
誤なり。
いふにハいはなり
りかの意也。
歌のもとゝいひしをで
君ふといふ哥の上
句をいふ。
などてかく云ヽハ。
清少の心なり。
これにハかゝる幼
き童子の意也。

などかまゐらせたまはぬぞといひて。こゝなる
所にあからさまにまかりてまゐらんといひて
いぬるのちに。御返事かきてまゐらせんとする
に。此哥のもとはさらにわすれたり。いとあやしくた
ゞふることゝいひながら志らぬ人やハある。
こゝもとにおぼえながらいひ出られぬハいか
にぞやなどいふを聞て。ちひさきわらハの前
にゐたるが。下ゆく水のとこそ申せといひたる。
などてかく忘れつるならん。これにをしへらるゝ
もをかし。返しまゐらせて。すこしほどへて
まゐりたる。いかゞと例よりハつゝましうて清

ばくうれいは遊仏
密ふ半面をうみて
半隠れるといふ
小町歌集ふ云どけ
うきねくうれ髪を
見せでしとやさと張
れうんうさのあさ
う段とあり
ふくさ寄うれどハ
いそでやふの寄の
単を居宮ののさま
ふるり

うぞ〳〵合ハ左方
右方よわうれて遊
ときて競今のや
うな勝負を争ふわ
さも
かたくるよハあ〳〵
でハなぞよおろう
ろ〳〵ぬを云

凡帳ふたゝうれるをおれハ今まみのうれ
どわ〳〵ハせのひてみくさ寄るれど氏折ハさも
いひつゞうりとるんもふとんつけでえふ
ばゝこゝろ〳〵慈しまずられすどのゝまハせてか
ハりたるはろ〳〵きもす。臺ふとゝ〳〵れ〳〵こ
とどうどけいをれハいみゞ〳〵わ〳〵ハせのひて
さる単でぞあまりひるゞるふるゝとハちをわ
りぬゞ〳〵すどゝ仰せ〳〵れてはいでふ人のうぞく
あふせ〳〵るふるふかくるるハあ〳〵でうぬう
の単にうゝくしうをるゞ左の一番ハおのき
いたんさもひのくすどたのむるふさうとるわ

たのむうハ約束
して競みるハ
しむるを云
さ申〳〵てハがやう
よ申ようゝよハの
云るり
日りと近くハるぞ
合の當日の近つき
るを云

皆うハ左右の方
々の人〳〵の番分れ
をるを云

あか〳〵ハ右るさな
たハ左方なり

ろう単ハいひ出ゞとうさだむるふ其詞をき
うんいうふすどとふゞでまうせて物ふたまつ
さ申〳〵ていとはをうハあ〳〵ゞといふをゞふ
かくれ〳〵ハうる日いと近う聞ねれバ程らの単の
なまつひざうふとう〳〵ゝ単をこゝれといふ
といさあ〳〵ずさゝゝバるこのまれそるゞむつう
きバなゞつうれ〳〵と思ひるゝ〳〵其日ふるうて
みるかゝ人の男女ふるけて殿ゝ人すどよきゝ人
人かゝ〳〵居るみてあるとるふ左の一ゞんふ
みゞう用意〳〵もてるゝ〳〵るさなのいうる
るをう言出んとゝ見えられバ彼方の人ゝ此方の人ゝん

もとうゝ行ものりてゐるぞゝといふかどいと心もとゐる。えゝ人よとりゆみといひ出たり。あなたの方のくいいと多うありと思ひさうふこそのうるのくいハ。猶もおぼえぬべきまゝうるりのうるのくいハ。猶もおぼえぬべきまゝうるりて。いとみくゝあいぎやうまゝてゐるふみとりうとさゝゝみまけさせんと云ふるとうどうゝとうきの程ふるふふあなさのくをうふ云ひてうちわらひて。やゝさゝゝうふ云らぬとは引うれてゐるがふ云うゝるふ。数させゝとてさゝせつ。いとあや云る事。是云ゝぬものうれうあゝん事ふうどさすまゝと論ぜんどうらぬとといひいぢんいる心もとゐ。つゝきりて沒よるぞその洞とゐさう。面白き話勢ゐう。奥あるハ。此るぞ童も知りうる事にて。とき女ゐれハ也。彼ゐるうりてハ。古ゐる心とうせて也。とこゐハ。おうりまとき。やすき事ゐれバ。ゐるづりふひてゐう。

やゝさゝゝにゐるすハ。誠ゐ知ゝぬるハあゝぞおぼえうていへゐるう。

さるうふハ。これごとゐう。

数させゝ。勝の数をさせとゐう。歌合よも負ゐといひゐるあり。天徳歌合ゐとふ出なるを見てゐるゐるし。

いとあやゝきゐるハ。右ゐるの歌ずる詞也。いみじうくの云々。右ゐるのくゐゝずといひゝ味ゐるとうこつ但也。

これハ云ゝ。妖ゐるぞハ清少の如ゝ云れなるまハあゝぶ。皆知りあてわざと知らずといひゐるを。ゐハうゝ童も知れる歌を。忘まこゐる事とゐう。

どてうまくゐるふゐるゝんとてぼざくゝのことばくふ論じうゝせゐる。いみじうくの知ゐる事ゐれど。たゞえぬ事ハさこそハあれ。何ゐうハえゐゝずといひゝと後ふ恨みられて罷ゐうけゐる事を語り出さうせのくバおまくゐる限ハ。ゐうもなもべゝ口をゝゝゐひをんごゐるくの心地をゝゝゐゝたりをんいうふゝかりゐんなどわゝふられくゝ忘まてゐるゝとうハ。皆くゐうゝゐうとうわ。

梔の若枝

百廿一段

正月十日。空いとくゝう。雲もあつゝゐんえうが

けさやかハ俗ニハツキリトいふと同じ。

ちもとがちニハ枝の多く出たるを云。

かけやりハ物ニかけて破りたるさまなり。

のぐりハ桃の木ニ丈ぼうしなり。

引ハこえハ上さまニ引あげて引ふくらしなるとゝふ枝ふひき重ね着なる也とあるハたゝ

らさすがふ曰ハいとけざやかにうふてりたるふえ
せ者の家のうしろおもてにけるどいふもの。
土もうるほうしねよ。桃の木わうぐちに
ていと赤をとがらかさいでたるうつくしつるハ
青くいまうる枝ハこくつやゝかふてすきうの
やうふ見えるふたやうする童のうりぎぬ
ハうけやりるどしてかみもうるハしきうのぐ
アとれバ紅梅のきぬ白きるどひきこきこと
るとのこゝどもうくてはきこる木のもとふくち
てわまふよきを本きうていでるどこふふみ
かみとうしをるわらべのおこわどもかこ

ばうくくハ半艱也。

いひて一本いふとあり。

おらしハ桃の枝をゆてふりおろしなる也。

まてハ木ニのかれる童の父ぎぐまてとうふうり。

かいつきていハ木ニとりつきてうり。

をるとハ一本おめくもとあり。

ろびがちふて。ぞうなもれこくれぶ色ものよ
きうちきなる三四人ぐうづちの木れようくん
きりておらせこくふめすぞるぶいひて。おろ
しくれだもしアとうひとりとき。われふ多くか
ぞいふこそとうしくれ黒きもうなるものの
こもしりきてこふよゆるぶいへバ木のもと
ふりてひきゆるのすふあやふぐりて猿のや
うふういはきてをるもとうし。梅すどのありこ
る析とさわうふぞるこうし。

双六うつ所　百廿二段

きすげするものこのすぐろくを曰ひと曰うち

かゝるさまハ相よを云。源氏帝夏の巻ゐこ
のさまよいとよく似たる事みえたり。

さハいみじう云こ。
さやうに面さいを
あしくれとこのり
のろひたりもよ
を目うたん物とと
なり。

はゝ姫か名れと実
きくと往ひくきく
との碁うつさまを。
いとよくうつ出

て。猶あうねふ。みどうきとうぶいふ火をあう
くかゝぎて。かゝをれさいをこひせめて。とみよ
をいまねぶどうとどんのうへふてゝまつ。
かうをぬのうびの顔ふのゝれで。ゆゝまをてれ
しいれて。いとこいからぬ忍ぶうゝをふりやりて。
さいいみどうのろふゝ。うちをづゝちんやと。
心もとうげふうちまりたるこそおらりこの
ふんゆれ。

碁うつふ　百廿三段

碁をやんごとうきくのうつとて。ひも赤とき。
いゞゝろうをふひろひおゝふ。花とりと

ひもかゝこまりうるくきに碁
盤よういとうとほゝてれゝびつ袖のあ
今うゝ手をて引やりつうちくるもをうゝ。
なをろゝきもの　百廿四段
はるぎみのうゝ。やけうる所。水ぶる。ひし。
髪多かるものこれ頭あゝひてをそなど。栗
のいゞ。
清ゝやうんゆる物　百廿五段
かゝゝけ。あゝゝきかるみより。ゝゝみふさ
をこと。水と物ふいるゝすうゞ。ゆうゝし
き細びつ。

ひもハ直衣の八組
なり。
袖のひこうるびゞ
しふ石をかけバ袖
の上よ我袖のさて
らぬやうふ心する
さまなり。
つるゝみのこの。和
名抄ふ橡樺實也と
みゆ。どんぐりの実
の類なるべし。

うるすりハ。和名抄
ふ金椀とみゆ。
水を物ふ云ゝすき
とかるものよりれ
し影を云。

手ぬぐひ洗ふ。内則ニ。凡内外鶏初鳴咸盥漱衣服欽被帷帳襲掃室堂及庭布席各役其事とみゆ。

ねり色のきぬとハ。練貫の衣ハ白きつやあるを故ぶしのよぶれやもみゆれバ。殊更きさうけるとハいへる也。

式部丞の云やく。紗ハ爵とみゆれど。宿臣ハ云やくハ笏ハ器物の類といへれバ。叙爵の類といふべし。

きさうげうる物　百廿六段

ねどみのをみう。ほとめてをおそくなるふん。白きはるぞる。すゝだれしありくちご。油いゝゝもの。すゞめのゐ。あつきかどふひさしくゆわみぬ。きぬのゐえるハ。いづれもきさうげうる中ふ。ねり色のきぬこそきゝるゐゞうれ。

いやしけるもの　百廿七段

ゐこぶのぞうの云やく。黒きかゝのをちふと。本びやうぶのゐゝゝを。ふりゐちみゝる。ハさるいふひうきもの。中々何とも見えず。

あゝゝゝくゐゝくて。櫻の花おかくさうせて。胡粉朱砂るどいろどりゝゝる繪うきゝる。やり戸ばゝ。何もあふうをものゝいやしきふり。むしろぞうの車ハたそひ。けびゝの袴。いよすのたちふとき。人のゐみふうしゐれふとりゝる。きゝとのいづもむしろのたゝみ。

ひねはぶるゝ物　百廿八段

ゝゝへ馬見る。もとゆひよる。あやうどの心地あしう云て。例るゝぬゝきるるまして世の中うどはとゞゝるきれよろづの事ハ云ぞ。又物いそぬちごれるきへて氣ものまず。いゝどく

出雲巡とて。かゝしこの土産ゐる由。式部式るみゆ

元結ゝるハきれん事を氣づふ故ゐるべし。

親ゐどの云ふめ心ハもとも胸つふゐ事ゐるべし。

いちちるかゝぬハ。誰と守ちゝぬ人の声ゝて。判然とわらぬ云也。
ことわりハ。胸のつぶ〳〵も道理とる り。
甚うゝるどいふよハ。我身のよとをゞげぐとといふ事ニ。
けさの文ハ。後朝の文を云。
うつくしきハ。多くハ愛ら〳〵きをいふ云ふ用ひ又美麗のゝ〳〵ちゝもやぐみあそれむ云ゝも用ひ〳〵。
ふゝふ美陸云瓜ハ和名抄ふ戸利とありて。古歌ゝも多くみえたる。皆ゝりとあるをゝ〳〵ふゝりとみえ又大猿遠長公傳ゝも。ふゝりを乞ハゞ器物を設けよとあるハ心得ゝ〳〵全ゝき誤まりしゝるゝへ〳〵云ゝ。されと此頃の俗話ゝるゝしも知ゝるへゝ〳〵す。猶よく考ふべき事ゝる。
尼ふそぎゝる源氏ゝるぐゞふ。小児の髪の短ゝきをおゝそぎといゝ。
禅がけふ云ゝ。是ハ児のさまゝるべし。美陸ハ宇都保物語の藏ひらき。國ゆつ

めのとれいぐゝうるもゝ。やまで久〳〵うるさゝる。
れいの所ゝるどふて。ことふすぐいちちゝるゝ〳〵ぬ
人の声ゝつけゝるいことゝゝ。人ゝるどの其う
へふどいふ。すぐづゝてはぶゝれ。いゝぐゝふく
ゝ人のゝゝゝるもいゝぐゝてあれ。よべゝさ
る人のけゝれ文の知そゝゝくゝさへはぶゝる。
ゆゝふ人のふみとりてゝさて出ゝるをみつぶゝる。

うはくゝきもの　百廿九段

ふゝふかゝゝるちごの顔。雀のふのねずゝき
するふをどりくゝる。ゝるべふるどつゝてすゝゝ
ればおやすぐめの出るどもてゝゝくゝむゝを

いとらうゝ。こいでゝうゝるちごの。いそぎ
てひくゝるをふ。いとちひさゝ麿ゝぶのちゝゝる
をゞざとふ見つゝて。いとをゝ〳〵げゝるゝ。ゝすび
ふとゝ〳〵へて。ゝとゝるなどふんせゝゝる。いとうはく
〳〵。あまてそぎゝる兒の目ふ髪のゝゝひゝる
をかゝいやらで。うちゝゝぶゝて抱ゝるぶゝこんゝい
とうつゝ〳〵。ふすゝゝげふゆひゝる腰のゝみ
れ白うをゝ〳〵げゝるをゝこゝるふうつゝ〳〵。おゝ
ゝふハあらぬ飯ゝわゝゝゝ。さゝでゝゝさてられ
てありゝゝをうつゝ〳〵。をゝ〳〵げゝるちごのあ
ゝゝさふふいぐゝてうつゝ〳〵むゝどふいは

うの巻に源氏薄雲の巻のなどをかくるもの。さもさとつゝみ袋にいれてかくるものゝうへに。それを背ゝ向へうけてゆひさすものとあげ。といへり。殿とあゝはゝ。童殿上とて。え服装にあらぬ殿ばらをゝ。

ハつ九つ云云。人の門の前をとゝろをる時。ものゞさる児の書ものをきくるゝ。とゝ愛らしきものゝうへ。きぬみゞらゝるゝハ。ひよろのさま。短き

きてね入ゝるもらうゝ。ひゝるのてうど。そちすのうへ紫のいとちひさきを。池のうとりあげてゝる。あゝふひのちひさきもいとうつくしゝ。いみじうこゝろゝる児の。こゝつをうるゞ。ろゝうつくしきゞ。こゝあゝのうすもゝろゞきぬるゞくて。たゝきあげゝるゞ。そひゝくるもいとうつくし。やつ九つ十ばかりのうるとのゝの声をきれゝげふて。みゝみゝるいとうつくし。鶏のひるのおしゞのふ白うとゝげふきぬみゞらるゝゝ。ゝ。ひゝく。やゝかゝゞゆゝくゝるきて。人のゝろ

衣着たるやうなるをいゝ。さりのつぼハ。舎利の壺ふて。佛舎利を玉壺ふ入たるゞ見ゆるをいゝる也。されと一説ふハるりの誤かといへり。かなゝくハ愛する意ふて。物然しきをいふふあらゞ。

あやゝくだちてハ。ひながちめきたる心ふて。なせそと思ふ子を去ひてなすさまなり。

ふたちてありくも。又おやのもとふつをゞちのりくゝ見るもうつくし。かゝのこ。ほりのつゞなでゝこの花。

人ゞえもるゝとの　百三十段

ことなるゝなきゝ人のゝれ。うなゝくゝ志ゝらをさをたる。ゝいぶきゝ行ゝきゝ人ゝ物いをんとするゝもまづさきふさつ。あなゝこゝふさふすむ人のゝゞどもの。四つ五つなるゝいあやゝくゞちて。物など取ちらゝてそこなふをつねをひきとられゝゞどせいせられて。心のまゝにもえあらぬゞ。親のきたる所ゝえて。ゆゝりける物をあを

見せよや母などに引ゐるゞをふ。おとなゝゞ物い
ふとて。ふともきゝいれねバ。をづうらうらさゞ
いでゝ見るこそ。いとふくけをそれをまさなと
ぞうりうちいひて。とりかくさでぢおせそ。そこ
なふとぞうり。ゑていふおやもふくし。われ
えをしたなくもいをでみるこそ。こゝろもとな
ゝれ。

名れそろしき物　百三十一段

あをぶち。谷のやら。をたいさ。くろゞね。
つちくれ。いゝづちハ名のみあらぢ。いをどう
れそろし。をやち。ふちうぐを。みこぞし。

引はられ。一本引いられとある然るべき歟。便言ふ。ツラヲハルといふ詞あをど。此頃さいふ詞いなかるゞし。
親のきたるの下に文字をいをて心得べし。
まさなとはうりハ。其子の汙さかすを。親のまさなゝとばかりいひて。其物を取もかくさぬを云。
はやちハ。風の名ふて。和名抄に暴風を

ふさうぐもハ。不祥雲なるゞし。
ゐこぼし。一本疫鬼とあり。
牛ハ佐目。一本うしかさめとあり。かさめハ。擁剣といひて蟹ふ似たるもの也。いふすゝ。一本いゝりとあり
がうさうハ強盗也。らゝおふハ。牛頭馬頭の類なり。
いちご。覆盆子とかくゝ。まことふ文字ハくことくしくこそ水ふきハ。芡實とかけり。

おかゝみ。うゝいさめ。らう。ろうのをさ。
いふすゝ。それも名のみあらぢ見るもおそろし。
なをむしろ。がうさう。又よろづふたそろし。
ひぢかさ雨。くちなをいちご。いぎをざま。
おふどころ。おふわらび。うゞら。からさ
ち。いをずみ。ぞうたん。うゝおふ。

見るふことなることとふき物ゝ文字ふかき
てことくしきもの。　百三十二段

いちご。つゆ草。ゑぶき。くるみ。もんをや
うをゝせ。皇后宮の檀大夫。やまもゝ。いさ
どうハまゝて。虎の杖とかきたるとゝ。つをふく

むつかしげハ、ムサクロシイ、メンドウナ、ワツラハシイ、イヤニ思フなどの意なり。

いと深うしもハ、男のあまり深くハ思ハぬ女なり。

えせ物の云々、常ハあなづらはしき物

ともからぬべき顔つきを。

むつかしげなる物　百三十三段

ぬひもの〳〵うら、猫のみ〳〵のうち、嵐のいまだ毛もおひぬを、すのうちよりあまくさまろびでし出たる。うらまゞつゝぬかをぎぬれぬひめ。ことふきよげならぬ石のくらき。ことなるゆなき人のちひちきゆどもなどあまくもちてあつゝひさる。いとふゝうしも心ざしふかき女の。心地ゆ〳〵うたて、久たくなやこたるも、男の心の中ふハ、むつかしげなる物。

えせもの〳〵ふうるをとりのゆ　百卅四段

の、折ふふれてハ時ふあふをいふ。

正月の大根ハ、齒がためなどふ用ふれバなり。

俗の文一本俗の名とあり。

春日祭ハ、二月上の申の日なり、まづ未の日勅使たつ、近衛の中將少將ゝれをつとむ、清和天皇の貞觀元年ふはじまれり。

菜子ハ、幼なき童女まて、まづ若菜をなめ、次ふきこ〳〵めすならはしなり。

みくじあげハ、五節の舞姫ふつく女房を云。

正月のおそね。　行幸ゝれゆのひめまうちぎみ。

六月十二月のつごもりのよをとりの藏人。　季の御讀經の威儀師、おゝげさきて、俗の文どもよみあげたる。いとらう〳〵し。　法どきやう、佛名などの所さうぞくの所ゝたう。　春日祭のとねりども。　大饗のところのあゆミ。　正月のくもりこ。うづゑのやうし。　五せちゝ心見のみぐしあげ。　節會の法ぢいぜんのうねめ。　大饗の日の史生。　七月のすまひ。　雨ふる日ゝいちめ笠。わさりするをとりのかんどう。

くるゝしげなる物。　百三十五段

御陪膳ハ、天皇の御給仕をつかうまつるをいふ。

さしもなきハ、驗のみえぬをいふ。

人とらえれふあらしハ、人ふ笑えれぬやうふとの意也。

一の所ハ、摂関の人をいふ。まさ一の人といふなり。

時めく人ハ、摂家なとふ近習ふて、召つかもるゝをいふ。

えやすくハあらぬといくるしきものなもとの意也。

心いらもしハ、煩ふてせもくしきを

歎かきといふ物するちごのめのと。　思ふ人ふたりとちて、こなたさゝなるふ恨ふすべらもとたるをとこ。　おそきものけあづりさるけんぞやげんざふをやくをよゝるべきを、さしもなきをさすゞふ人わらをれふあらじとぬんぞる。いとくるしげなり。　わりなく物うさゞひする男ふ、いとゞう思いもたる女。　一の所ふ時めく人も、えやすくハあらねど、それハよゝめり。　こゝろいらもしたるくゝ。

うらやましきもの。　百三十六段

經など習ひて、いみじくたどくしくて忘もゞち

いふ。法師ハことゝりハ、よくよむハ理ふて、いふも更なりの意なり。

稲荷ふ思ひおこしてハ、稲荷詣を思ひ立ちての意也。

中の社ハ、延喜式神名帳ふ、稲荷神社三座下社大山祇中社倉稲魂上社土祖神とあるこれなり。

二月午の日云くハ、清少納言、初午稲荷まうてしたるもの。

まて、かへすゝおなじ所をよむふ、法師ハことゝり、男も女もくるゝとやすらゝよみたるこそ、あれゞやうふ、いつのわとこそふとおぼゆれ、心地など好ひてふしたるふ、うち笑ひ物いひ、思ふなげふて、ゆゆみありく人こそ、いとゞくうらやましけも。　稲荷ふ思ひおこして参りたるふ、中の社のわど、わりなく苦しきをねんじてのぶるわどふ、いさゝらくるしげもなく、おくれてくと見えたる者どもの、さゞゆきふちきだちてまうづるいとうらやましく、二月うまの日の曉ふいそぎしらど、坂のならだらりあゆみしらべ、

かゝらぬ人も云くハ。らく。わびしらざる人も世ふあらんをとの意也。
つぶさうそく云くハ。よき人ふハあらぬさまをいふ。引たこえハ。引あけたる也。
まろハ云くハ。彼女の詞也。
七度詣ハ。一日ふ七度まうつる也いなりへ七度詣つるゑ信心ふてなり。
かれゝゑよハ彼女をいふ。我ありきゝぬる時なれハなるべし。

この時ぞりふなりふゝり。やう〳〵暑くさへなりて。まことにわびしうかゝらぬ人も世ふあらんものを。何ゑよまうでつらんとまで。涙おちてやまむふ。三十あまりぞりなる女の。つぶさうそくなどふハあらで。さゞ引たこえたるゞまろた七度まうでゑ侍るぞ。三度ハ詣でぬ。四度ハことふもあらず。ひつゞふた下向ゑぬべしと。たゞひとる人ふ。うちいひてくゞりゆきこそ。只なる所ゑてハ。めもとまるまじきゑの。かれゞゑふたゞ今ならぢやとおぼえしゝ。男も。女も。法師も。よきゑもちたる人。いとゞうゑらやましし。

さゞりぢハ。下りたる髪のさまをいふ。髪長くうるたしう。ちゞりぢなどめでしき人。やんごとなき人の。人ふかしづゝき給ふも。いとうらやましし。ゑよくゝき。歌よくよみて。物の折よもまゞとり出らるゝ人。よき人の侍ふ。女房いとあまたさぶらふよ。心ふくき所へつゝハすべきおゝせゞきなどを。誰も多の跡などのやうふた。などゝハあらん。さもとゞゑもなどふ所るをわざとめして。古硯おろしてかゝせさせ給ふうらやましし。さやうのゑハ。ふのおとなゑどふ成ぬもべ。まことふふゑわたりのとほゝらぬもゑふゑゝさゞひてかくをこれハさいゝらで。上達部

よき人の侍ふ云云ハ。是より彼女をよくかく人の義しきゑをいふなり。
多の跡などのやうふハ。ゑの多ゑふあしきをいふ。
さやうのゑハ。心ふくき所への仰せ書のゑをいふ。
難波ゑゝさりの云くハ。ゑ跡の未熟なるをいふ。俗ふ机ゑな

れせぬといふ類也。
これハさいあらてハ。下手なるふりゝなる折ならての意也。
上達部のもと云々
なとふるいふやうの方へ遣すべき由文ゝえの意也。
あつまりて云々ハ。彼をよき人を人ゝあつまりて。ねさきすかと戯るといひて義むとの意也。
三味堂ハ法華三味念佛三味なとゝて。他すなく甚すのゝうけ行ふ堂を三味堂といふ也。
かゝときのさいきゝたるハ。相手のさいのゝく出るをいふ。

のもと。又えとゞめてまゐらんなど申さする人のむもめなどふハ。心ことふうへをりをしめてつくろハせ給へるをあつまりてたゝぶをふねさゞりいふめり。琴笛習ふふさこそハまゞゝきわどハ。うゑゞやうふいゝ〳〵ゝとおゞゆめを。うち東宮の吉めのと。うへの女房の吉ゝゝゞゆるさゑたる。三味堂さてゝ。よひ曉よいのられたる人。すぐろくうつふ。かゝときのさいきゝたる。弥ゝ世を思ひ捨たるひゝ至。

とくゆゝゝきもの　百三十七段

まきぞめ。むらゞゝ至物など據たる。人の子

とくゆゝゝきハ早く見まほゝゝくきかまゝゝきをいふ。くゝり袴ハ。括物ふて。くゝり染といへる物なるべし。
ぢもくのまゝつとめてハ。縣召除目の翌日早天をいふ。さて知人の必受領すべき年ハ。何れの國守と。ゝく関ゝまほゝゝとの意也。
とみの物ぬひい急の裁縫まて。近き晴ゝざふきるへき料の物を縫ハせたる時をいふ。
居いりつゝあなゝこゝゝゝを云々ハ。物見の所ふ入居て来る方を見つめて居

うゝたる。男をんふとくきゝろまゝし。よき人ハさらなり。えせ物げものきただよきゝろまゝ。ぢもくのまゝつとめて。必ゝる人のなるべき物もきゝろまゝ。おゝをふ人のおこせさる文。

こゝゝろもとなき物　百三十八段

人のもとふとみの物ぬひまやりて待わど。物見ふ急ぎ出て。今やゝとくゝる〳〵ゝ居いりつゝ。あなゝをまもらへたる心地。ゝうむべき人の。わるゝ〳〵きのなき。遠きふゝりゝ見ど遅るまでゝゝるゝ〳〵きのなき。遠きふゝりゝ見ふ人の文をえて。ゝたくふんゞたるそくひなどえ。ゝたくふんゞたるそくひなど。ものゝふ急ぎ出で。

る心地ゐもとゐしとの意也。
ふんどたるハ封したる也。
そくひハ積飯ゐそ糊付て封したるをいふ。
白き笥ハ警固の白杖を持て来るをいふ濱居云たゝ警固の笥ゐハあらて祭そてたるゐとより。
使の廳なとへ引行く罪人をひき来れる警固の笥也。祭の警固ゐハあらす。されハやりよするといひたるも罪人をいふなるべし。
まへなる人ゐ教へ物いそせゝるハ我ハ隠も居て前の人ゐ我此ゐあらぬ由を教ていそせたるの意又我ハかくれ居て前なる人ゐ物いそせてきゝゐたる心地心もとなし
と両説あり。
いちもゝろハ五十日百日也。
ありぬべき砂をとらへてハ我ハ糸付くへき針を指居て人ゐつけさするなるへし。
只今おこせんとそハ其ゝりし車を追付返さんとて乗出しとの意也。
さなりけるとハ我車のかへるなりと喜ふとの意也。
事ハなりぬらんハ。

るなりゐゝり。白きもとなどゐ付たるゐ。ちゝくやりよするゐど。わびもうおりてをいぬべき心ちこそすを。 もられゝとゐふ人のあるゐまへなる人ゐ教へて物いそせる。 いつゝゝとまち出たるちごの。いゝもゝかなどの程ゐたるゐ。好来いと心もとなし。 とみの物ぬゐふく。らき杉。そりゐ糸つくる。ちれどわれをさる物ゐて。ありぬべき不をとらへて。人ゐつけさするゐ。そをもいそげハゐやあらん。とみゐもえさゝいれぬを。いで只なをげそといへど。さをゞゐなどてゝハとゐひゞゐゐえさらぬハ。ゐくさちへそ

ひぬ。 何事ゐもあを。いそぎておへゆくをゝ。まづゝゞちるべきゐへゆくとて。只今おこせんとて出ぬる車まつゐどこそ。心もとなゝれ。大路いきけるをちなりけるとゐろこびされバ。おざまゐいぬるいとゝをゝ。まして物ゐゐいでんとてあるゐ。ゐハなりぬらんなどいふをきくこそ侘しゝれ。 ゐうゝける人の乃ちれこと久ゝき。物ゐゐや。又清ちるまうでゐどゐ。もろともにあるべき人をのせゐいきたるを。車さゝゐせたてゞ。とみゐものらで。まゝするも。いと心もとゐく。うちすてゝもいぬべき心地する。 とみゐいり

祭の日さる時刻ふなりぬらんとの意也。
後のゝ八。後産ゐてえなのとゝこほるをいふ。
いりすみハ煎炭也。
けさう人なとハ云云ハ。懇々弱思たせて遅くすべけれバ。さやうふいそくましけれと。又自然いそくべき折もありとの意也。
ときのみこそハと云々ハ。口疾きのゝこそハ規摸ならめと思ひて急きよみ出れハ。僻ゐも出来るとの意也。
まつもくろめハ。松葉黒待歯黒両説也。

ずみおこせ。いとひさし。人の影のかへしとくをべきをえよみえぬわど。いと心もとなし。けさう人などハ。さしもいそぐまじけれど。拓のづからも又ちるべきわもあり。又まして女と男もたゞふいひうハをゐどハ。ときのみこそいと名ふゐどふ。あいなくひゞゐも出くるぞうし。又こゝちゐしく物わそゐきわど。炭の白るまつこそいこゝゐう心もとなけを。まつぞぐろめのひるわども心もとなし。

官のつかさ　百三十九段

故殿の法ぶくのころ。六月世日ハ法さらへとい

季鷹云。まつの二字衍ゐ。上の行の明るまつのまつ。誤て此ふハいれるなるぞし。さて歯黒のひるをまつゐと也。
濵臣云。是又よくもあらず。今思ふふ上文のいひつゝけたる例を考れバ。まつハまこを書ひろめたる也。又の意ふてよくきこゆ。
故殿ハ。中関白殿也。
出させ給ふぞきハ。中宮定子の出給ふべきをの意也
官のつゝさのあいたる所ハ。太政官廳也。一本あいたん所とあり。朝所なるぞし。

ふるに出させのふべきを。ゐきの法ざうしい。方あしとて。官のつゝされあいたるふよゝらせゐへり。ゐ衆いさバゝりあつくわりなきやみふて。伺ゐもせバう。尾ぶきふて。さまことなり。れいのやうふ格子などもなく。只めぐりてみゐバゝりをぞゝけたる。中々めづらしうをゝ。女房庵いふおりなどしてゐそぶ前栽ふハくハんざうと。草をませゆひていとおゐく植たりける。花きハやゝふかさなりて咲さる。うべゝゐきゐのせんざいよハよし。時づゝさなどハ。さゞかゝハらゐて。かねの音もれいよハ似ぎこゆるを。

くるんさういは、萱草也。
うへ〳〵しき所は、歴々なる所ゐは似合しとの意也。
時つかさは、漏刻博士をいふ也。
うもふひの云くは、薄鈍の喪服也。
おしあけられたる人とは、若くさくも上蔀をとろ〳〵しく登らぬさま也。
遣戸たる人くは、年たけ上蔀なる人をいふ。
上達部のつき給ひしは、公卿の着座し給ふ所ゐの意也。
うちとわしは、開放ち通しての意也。

ゆろ〳〵がりてわらき人々二十餘人ぞうりそかたよゆきてたしまふり。たらきやゐのぞりたるを。これより見あぐれば。うをゐびの裳からきぬ。おなじ色のひとへ〴〵ぐさね。ゐの袴どもをきてのぞり立さるは。いと天人などこそ。えいふまじけれど。空よりおりしさるよやとぞ見ゆる。おなじわらさゐまどおしあげられたる人はえまどらで。うらやましげゐふ見あげたるもをろ〳〵日暮てくらまぎれゐぞ遣したる人〴〵なさちまじまて。右近のぢんへ物見えゐ出きて。さいぶれさとぎ笑ふをあめまろを。かういせぬるなりと達部のつきのひしなどゐ。女房どものぞり。上官などのゐる障子を。皆うちとほしそこなひたりなどくるしがるものもあるとどきもいれば。座のいとふるくて。かはらぶきなれぞゐやあらん。暑さの世ゐ忘らねば。みもそのとゐ。ふるもふるもきゐ不なれば。むろでといふ物。日ひと日おちかゝる。蜂のまれおわきゐつきあつまりたるなどいとわそろしき。殿上人日ごとゐまゐる。秋もゐあろし。物いふをきゝて。秋ぞうりまや。太政官の地のいまやうれゐをとなるんゐをとぞこじ出たりしくこそをろしかりしゐ。秋ゐなりたゐとか

今やうのゐは、やかうは八講ゐ。傍注云。やうのゐは、野郊場なりと

たへすゞしからぬ風の、ふゞらなめり。はもぐみ虫の鳴などいきこえたり。八日ぞかへらせぬ、ば、七夕まつりなどみて、れいより近うゐゆるぞ。

又濱臣云、やうハ野干の音便うと諸説ときうたし。うたへ涼しうらぬ風のハ、古今集ふ夏と秋と行ふふ空の通路いうたへ涼しき風やふくらんとあるをうけて、残暑をいへるなり。

是ふう三月卅日のうとおわしき話也。

人間の四月ハ、白氏文集ふ人間四月芳菲尽山寺桃花始盛開長恨春帰無覓處不知轉入此中来とあるをいふ。

百四十段

人間の四月

宰相中将たゝのぶ、のぶうたの中将とまゐりぬるふ、人ゝ出て物などいふふ、ついでもなく、なにいうなる詩をうといふふ、いさゝうう思ひめぐらし、とゞこわりもなく、人ゐれ四月をこそいといらへゐへる。いみじうをうしくこそ道たるなれど心えていふいをうしき中ふも、女だう

心得ぬと思ひたるハ、文集の句を覺えて居さるをいふ也。

ほそどのゝ一のにハ、弘徽殿の東の廊の第一の戸口なるなし。

さべうせハ、退出せし也。

露ハ別の涙ハ、菅家文章ふ、露為別涙珠空落雲是残粧髪未成といへる句をい

などこそさやうの物とすれハせね男ハさもあらば、ふみたる歌をだふ、なまおぼえなるを、誠ふをうし、内なる人もおなる人を、心えぞとおもひたるぞ、ことわりなるや。

百四十一段

忘れぬ人

此三月三十日ゆそどのゝ一乃口ふ、殿上人あまたたてまつりを、やうくすべりうせなどして、さゞ頭中将源中将、六位ひとりのこりて、ろびのるいひ、縁ふみ歌うたひなどするふ、ほをてぬなり。風りなんとて、露ハ別のなみだあるべしといふるを、頭中将うち出しゐへれバ、源中将もろともふ

ふ也。
いそきたる七夕ハ。三月三日ふ七夕の詩を唱へたるをいふ也。

あらくなりふーハ。夜明をてたるをいふ。
葛城の神ハ昔役行者金峰山と葛城山の間ふ岩橋をらけさせしふ葛城神貌醜き故昼の役を佗たりといへるすを。拾遺集ふ岩橋の夜の契も絶ぬべし。明る佗しき葛城の神

いとをらーうずんーたるふ。いそぎたる七夕らなといふをいそどうぬさぐりて。暁の別のをぢの。ふとおぞえつるまゝふいひて。わびをうもあるわざらなと。すべてはとるとふてハ。らゝるすゑひまをちぢいふハ。口をーきぞらーふどいひて。ゐまりあらくなりふーらバ。かつらきれ神今ぞすぢなきとて。わけてたをーふしを。七夕の折はるをいひいでゝやとゑひーらど。宰相ふなりゐひふーらバ。ゑしをいらでらハ。をゑどふえつけなどもせん。文らきてとのもづらさーてやらむなどゑひしゑどふ。七日ふまゐりゐへつましら

どもゝふりさてこもその心なるべし。
ゝけておをーふしハ。露を分て帰りたるゝて。露ハ別のと吟し給ひーをらけたる也。
其ゑどふ見付なくもせんハ。其七夕の頃ふ見付て此すをいをんとの意也。
うちらゝふきハ不審し給をんとの意也。
いらてさはゝ云をハ。行とーてさやうふ又豫て覚悟せしるのやうふ覚えを答へ給ひけんとの意也。
男ハてらけんハ是

バ。嬉ちくて。を歌のすなどいひ出を。心とをえゐふすゞろふふといひさらバ。あやーなどやうちらたぶきゐハん。さらをそれまハ。ゝーるいをんとてあるふ。霧おぞめらでいらへゐへうしらバ。まことにいみどうをらーらりき。月ごろいつーしらと思ひ侍りしだふ。わが心なぐらすきゞーとおぞえーに。いらでさはゝゑひまうけたるやうふのたまひをんん。もろともにねゝぐりいひー中将ハ。ゑひもゝらでゐゝるに。有し暁の河いまーめらるゝハ。知らぬらとのゐふまぞ。げふさしつゐどいひ。男ハてらをんなどいふすを。人まハ

ハ清少納言と齊信卿のあひことゝなるなり。

よき中なれハ、齊信宣方中ふけれハ甚子細をきゝ給ひしなり。

いふかともなくハ、てうけんといふハきゝ給ひたれと、又程なく他のあひ問をいひしも。

我もちりふける云云ハ、宣方の心なり。問ゆて知たりと知られんとの意なるべし。

ごぜん侍りやハ、碁盤なり。いひくらん為ふいへるゝを問なり。

たらせぜ、此君と心えていふを、伺すぞくと、源中ゐるハそひつきて問へどいさゝねバ、うの君ふ、ふゐ
ものゝへとうらみられて、よき中なれバきゝせてゝり、いとあへなくいふゐどもなく、ちうふ
りぬるをバ、おしふゐのほどぞなどいふふ、我も
たりふけるといつゝうたらゑんとて、わざとよ
ひ出て、ごぜん侍りやまろもうたんとゐふいい
うゞ、まハゆるしめゑんや、頭中将とひとゝごふ
り、なおぞしわきそといふふ、さのみあらバ、さざ
めなくやといらへしを、うの君ふかたり聞えて
をバ、うをゝくいひたると悦びめひゝ、将過たる

まハゆるし給えんやハ、心とけ給えんやとの意也。源氏竹河巻ふ哀とそをもるせうし生死を君ふ任する我身となるハとある同し意ゝ。

さのみあらバて、女のさやうゝ人ゝ蘇らバ、不定の物ふならんとの意也。

せうくといけいのハ、朗詠集ふ菁會鬱之遥古廟記締昊代之交とあるをいふ也。

ゐをしならでもい、宰相ふなし給はてあるとうしとの意ふて、上達部ふなりて、昔のやうゝもまゐる

る恋をぬ人ゝいとをうゝ宰相ふなりめひしを、
うへのおまへまそ侍をいとをうしうずんで侍り
しものを、せうくといけいのこびやうをもるふ
ゝなども、誰ゝいひ侍らんとする。ゐバしならで
もさぶらへうゝ。口をゝきふなど申しゝうだい
みドう笑ハせめひて、さなんいふとそ、なさどう
ゝなどおゐせられゝもをうゝ、ばれどなりめひ
ふゝうバ、謙ふばうぐゝうつゝしに、源中将おとら
ずと思ひて、ゆゑぐさちあつくに、宰相中将のほう
へをいひ出て、いまぐこ十のごふおよをずとい
ふ給を、こと人よハ似ぞ、をかゝうずしめふなど

らずおもくしくあれバなるべし。いまゝこゝ十の期ハ本朝文粋ハ菅田周賢者ハ至三十期とあるをいふ也。

ぢんふつきのへりハ齊信卿の着陣し給へるなり。

ちらぬふハ清少納言の知らぬ也。ゝくふせてハ齊信の聲ふ似せて也。

かゝゝハきのふ齊信ふ朗詠を習ひし

いへバ。なゝどゝそれふおとらん。まさりてこそせめとてよむに。さらよわゝくもあらぢといへバ。わびゝのすや。いゝで。なれゞやうふずんぜでなどのすふ。こゝのごといふふなん。まぐていみじうあいぎやうづきたりゝふどいへバ。ねさゞりて。わらひあまくふ。ぢんふつきのへりけるわふ。わきてよび出て。かうなんいふ。校そこをゝへぬへといひくれハ。笑ひて教へけるとちらぬよ。つぶねのをとゝまて。いゝゝどくふく似せてよむふ。あゝゝてこいゝとそとへバ。ゑみごゑふなりて。いゝゝどきこゝん。かゝゝきのふぢんふつきたりしにとひきて。さちふゝるなあり。誰ぞとふくゝらぬけゝきまてとひのへれバといふも。わざゝ。ち習ひ給ひそん。をゝけれど。これざふきけど。出て物たゞといふを。宰相の中將の怪ゝるす。そなゝふむゝひてをゞむべしなどいふ。ちもにあまあゞら。上ふなどいゝするふ。これをうちいづゝハ。涙ハあまなどいふ。物まへふかくなど申せバ。笑ゝせのすふ。内の中物忌なる日。右近のさうくゝん。ゝつかふとゝやいふものゝて。さゝう紙ふかきておこせゝるをゝれど。さんぜんとするを。今日ハ清物いゝふてなん。三十のごふ おゝぞ

ゞをつふ也。ちふたるなめりハ。司ふ付みてゝゝひゝとの意也。

宰相の中將の徳見る事云くハ。宣方の詞ゝて。清少納言の出て物いふも。齊信の朗詠を教へし功徳を見るとの意也。下ふありなゝらハ。常ハ清少納言局ふ有ても。后宮の御前ふなゝといひて。留守つゝひて宣方ふあをぬゝとの意也。光なふとゝやいふハ。名の下の字を忘れたるなり。

其ごハ過ぬらんハ、宣方の年齢をさをふれていふ詞なり。三十歳ハ過て四十餘五十歳ふもあらんとの意也。前漢の朱賣臣ハ妻買臣ハ貧しきを疎ミて去んとを請ひしに、買臣笑ひ曰、我年五十當富貴分已四十余矣、女若日久待我富貴報女功とをしへいさめしかあるふくりてゝ返事ぜるなり。

うへの御ぞハ帝をいふなり

いゝでゝゝる事ハ、前漢書を知り先るを御感の詞なり。

ぞハいいうゞといひたれバ、かへりごとまでゝ、をごいを過ぬらん。志ゆをいはゞめををしへけん年ふを

しもとかきてやりたりしを、又ねさゞりてうへの御ぞのもそうしをれバ、宮の御かさふ渡らせたまひて、いゝでかゝるるハ志りしぞ。四十九ふ年ぞる年こそさハいましめられとて、のぶりたハわび志ういそれふさりといふめるハと笑をせぬひしこそものぐるほしゝりける君うあと

笑えしゝ。

うちふし

百四十二段

こきでんとハ、閑院の太政大臣の女御とぞきこ

おそしまいしハ、濱臣云、おそしまし〜ふの音便なり。まして、をまいてとハいふ同し。

御とのゐハ、宿直也。

とのゐ所をさふハ、我ふ休所をありとも給ふゝの意也。

まことふ人ハうちふしやすむ所のハ、清少納言の詞まて、彼うちふしゝむすめ左京ふをを秀句ふいへるなり。

ゆる。左京御うたふ。うちふしといふものゝむすめ左京といひてさぶらひけるを、源中將ゝさらひて却もふなど人ゝ笑ふ比、宮の志きふおそしまいしふまゐをて、時くハ御とのゐなどつゝうまつるべくれど、さるべきさまふ、女房などもてなしぬそねバ、いと宮づゝへおろゝふさぶらふとのゐふをゞふゆゝりたらんハ、いみだうまめふさぶらひあんなどいひるゆひつをバ、人々ゞなどいふをゞふまことふ人ハうちふしやすむふのあるこそよけきさるゆたりまを志ぐくまるり給ふなる物をとさしいらへてゝりとてすべ

すべて物きこえす云々ハ、宣方の詞ふて、清少納言ハ口さかなりす、我方人とたのみしふとの意也

人のいひふるしたるハ、世の人もいとゆいひふるすふそれと同しさまふれ意也。

ほとゝぎすハ濱ほ云、今俗ふあつくふるといふふ同しく、腹立ちいうるをいふあらんといへり。

うのいを世給ふハ、清少納言のをしへていとすると宣方の恨み給ふとの意也。

てものきこえんぞかゝる人とたのこゝきこゆるをバ、人のいひふるしさるさまふとうなしゆふなどいみ〻うまめゞちて恨みゆふ、あふなやゝいうなるゆをうきこえつる、更ふ聞とゞめゆふゆなしあどいふ、うたハらなる人をひきゆるゞせゞさるべきこともなきを、ゆとゆり出ほふ、さまこそゆらめとて花やうゆわらふふ、是もうのいそせゆふならんとて、いとおしゝと思へ、更ふさやうのゆをなんいひ侍らぬ、人のいふだふふくき物をといひて、ひきいりふゝうゞ、後ふも物人ふ、はぢゞまゝきるゆいひつけたると恨こて、殿上人の

笑ふとていひ出たるなうとのゆへバ、さていひとりをうらみゆふべくもあらざめる、あやゝふどいへバ、そのゝちいとゝやみゆひふゝり。

むゝおぼえてふようなる物　百四十三段

うゞんべまれさゝみのふりて、ふゝ出きたる。

からゑの屏風の、おもてそこふそれさる、茂のうゝりたる松の木かゑたる。ぢずりの裳の花うへりたる。　ゑゑのめくらき、きちやうのこたびらのふるまぬる。もかうのなくありぬる。七尺のかづらのあゝくなりたる。えびぞめのおりものれをひゝへりたる。色ごのそれ老くゞ

とゝえやみゆひふけりハ、宣方の左京と中絶しとの意也。

うげんべりのさゝみハ、繧繝の縁の畳也。

ぢずりハ、地摺まて、白き絹ふ縹色のこもんなとすりたるをいふ。

花うへりたるハ、縹の色さゝたる也。

ゑゝじのめくらきハ、衛士ハ非常をまもる物なれハなり。

七尺のうつらハ、長

きゝもしをいふそ
の年へて色のそゝ
たるいふ用也とも也
えびそめの云くハ
薄紫也紫い榛の炭
をさすものなれハ
甚色のさめたるを
灰のへるといふ也
六位の頭白きハ若
きハ赤の昇進のさ
のゝ〜けなれと老
たるハ頼そなしと
の意也
人の事なしらほハ
事を成就せんとす
るさまなり
一番ふろつすぐち
ハ赤のまゝもあり
へゝれいなり
経ハ不断経ハ常ふ
撓むましきの頼み
うゝき意なるべし

ゐをたる　面白き家のまゞちやけさる池あど
ハさながらあをどうき草みくさ志ゞりて
たのもしげなき物　百四十四段
心みぢらくて人を忘をゞちなる　むこのよゞを
ゞちなる　六位のかゝら白き　家ごとする人
のさすゞよ人のるなゝゞゐふ大るうけたる一
番ふかゝまぐ六　六七八十なる人れこゝちあ
しうあて日ごろふなりぬる　風吹よ帆あげた
るふね　経をふゞんぎやう
ちゝくてとゐき物　百四十五段
をのゐとりのまつり　おもそぬはらから志ん

をのゐとりの条ハ
たとへハ春日ハ幡
など遠き所も其後
式ハ宮中すてあれ
ハ近くて遠きなる
べし
くらまのつゝらを
りハ今鞍馬ホセ曲
といふ道あり近き
道をまゝりのゐれ
ハ遠きなり
ぐくらくハ阿弥陀
経ホ西方過十万億
佛土有世界名曰極
樂と又阿弥陀佛去
此不遠ともとける
主ゐる意し
舟の道ハ三四十里
の道も風ふれハ
一日一夜ゐもゆく
きなるべし
男女の中ハ男女其

ぞくの中　くらまのつゝらをりといふ道　志
ハもの晦日む月一日の酉ど
とほくてちゝき物　百四十六段
ぐくらく　舟のゐ　男女の中
井ハ　百四十七段
ゐをゝうねの井　そし是井ハお坂ゐるゞをゝし
き　山のゐ　さしを濃きため〜ふゐ是そじめけ
ん　あすゝ井　みもひもさむ〜とゐめさるこそ
をゝしゝれ　玉の井　せゝう志やうの井　櫻井
きちきまちの井　千貫の井
受領を　百四十八段

類甚さ異なるものなるら。夫婦合体の理い遠くて近しといふべし。
ほりうねの井い武藏國也。志井い。近江國也。
山の井云くい。万葉集ふ浅香山影さへ見もる山の井の浅き心い我思ふをかくふとある類いと多し。陸奥國也。
あすら井云くい。催馬樂ふ飛鳥井ま宿りいすべし陰もよしこそもひもさむしこそ草もよしとあるをいふ也。
せうちやうの井い。少弐の井。大炊寮門の南ふあり。

紀伊守　和泉。　百四十九段

やどりのつらされごんのらみえ。

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

大夫い　百五十段

式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人。

思ひらくべきるまもあらば。かうぶりえて。何の大夫。掃の守などといふ人の。板屋せばき家もたりて。またこひ姫などの彩らしくし。車やどりふ車引さて。ふ近く末おひくたて。半つなぐせて。草などかをするこそいとふくけ也。尾いと清げふて。紫ぐを志ていふすらけわたして。ぬのはらうどはり

受領い國司のことをいふ也。
紀伊守い。上國なれば。従五位下也。和泉い下國ふて。従六位下なり。
やどりのつらさの掃守い。官の外記ふとの五位志さるら。頭て頭戒ふ任しらたきを外國等ふ志ぞし任す。これい官を宿す儀なり。掃守い。戒原抄云。掃守者。近代多是遥授也。遥授とい。任國ふ起かぬをいふなり。
下野以下五國い皆上國ふて掃守あるなり。
大夫い。侍の叙爵せしをいふ。即ち八省

てもまひさる。ふるい門つくさせなどるおこふひさる。いみどうおひはきふく。心づきなし。おやの家志うとをさらなり。をぢ兄などのすまぬいへ。をさるべきく人のなるらんを。おのづらむつまじう字ちたりたる受領。又國へ初ていさづらなる。はらぶい。女院宮ならなどの屋あまさいるふ。つらさまち出て後。いつしらとふき丞尋ね出て。住たるこそよけ也。

女のひとりすむふ　百五十一段

女のひとりすむふなどい。さゞいさうあをて。つひぢなどもまさらず。池ふどのいるふい。みく

の丞、左右衛門尉、右と五位ふなりなる時、中務大夫、式部大夫なといふ侍の面目なり。

こひろきハ、小檜垣なり。

前近く云こハ、庭の度らぬをいふ也。紫うえしてハ、紫の華すえ簾をかけたるをいふ也。

ぬの障子ハ、布障子なり。

おひさきなくハ、行さきの新なきをいふ也。

おやの家云こハ、是ふう彼門強くさせなといひしるの心つきなきふ付て、位べき家ハ、後初まて、

さる、意なともいとよもぎたゞ草などこそせねど、不々すなどの中より、あをき草ゑえさびしげなるこそ哀なれ。物ゐしこげふなだらかふすりして、門いとうかゝめきいゞたきハ、いとうたてこそおぞゆれ。

宮づゝへ人の里　百五十二段

宮づゝへ人の里なども、親どもふさりゐるそふし、人ゐぞく出いり、おくれゐたる、ゐまさまゞくのこゑおおくきこえ、馬のおとして、さわゞしきまであれど、かなしきれど忍びてを、あらハ也ても、おのづゝら、出あひけるをゐらでとも、又いつ

少しあれたるやうなるゐふきゐをいそんとて、其後初のおハ、ゐくるたくひなるゐふしと、さまざまゐつけたり。ゐちさまち出てハ、後ふ任し得て後ふすむこそよけれとの意也。

なたらゐふすりしハ、大抵ふ見ふき程ふ後理してなり。

きいくしきハ、急なしたるさま也。

人ゐぞく出いり云云ハ、宮仕する余情こそ賑しきやうなれと、父母なきハ便なく悲しとのこと也。

出給ひけるをゐらでハ、忍ひ男の詞也

このまゐりゐふなどもいひふさしのぞく、心ゞけたる人ハ、いゐゞハと門あけなどするをうたてゐしきいとふくし、おゐ門ハさしつやゐどとハすをバ、まゞ人のおとすをバなどなまふせゞしげに忍ひていらふるゐ、人出あひなどとくさせ、はごろハぬを人いとおゐゐりなどいひたる、いとむつゐしゐ、ゐちきく人ゞゐ、ゐ人れともなるものども、これゐく今や出るとゐえぞちしのぞきてゐしきゐる物どもを、わらふべかゐゐ、まゐ打するもきゝてゐいゐゐいとゞきび

心うけたるハ、逢見ん隙もやと心うけし人のさまも、うたてさとらしうハ、夜中まて駐しう、心もとなうりて守ることの侘しきをあるへし、駝おきく人の里再あれハ家主の心まもまらせ、家守ふとのきひしく守るふつけて也、なまふせらしけまハ、彼とひ来てある人を、防きらましくいとゝしけふ門守のいゝふ也、

この かく今や云くハ、門守の客え今や出給えんとてのそき伺ふを、客の供人の笑ひてまねびふとすとのさなう、

このらく一本ふけちらくとあう、色ふ出て云くハ、彼来訪ふ人のふをいふなう、やらえるハ、逐えるる也、

おやそひぬるハ、親の守りぬる人ハ、門守のむつらーきう、猶つゝましくこそあれとの意也、ましてまことふらぬハ、ものしき駝也、さそあらんハ、見たとのゆふハ、狂ふ人ふ逢ふのつゝましらんとの意也、心らーしくもなくハ、門心らしけふさゞずてのさま也、

しういひとゞめん、いと色ふ出ていたぬも、おもふ心なき人ハ、必きなどやする、さをどすくうろなるうたハ、夜ふけぬ門もあやふうなるといひていぬるもあるを、まことなる心ざしことなる人ハ、そやなどあまことびやらハるをど、狂居あうせぞ、たびくなるまくふ、あけぬべきくしきをめづらうにそひて、いこじき門を、こゝひらいさうとあけひろげてと、ゆえごちて、あぢきなく暁ふぞさすなる、いうゞふくき、おやそひぬるハ、なれこそなれ、まゝてまことならぬハ、いうふ出ふらんとさへ、ゝまゝうて、せうとのいへなどもげふきくふハはぞならん、狩中暁ともふく、門いと心ゞゝこくもなく、何の宮内ひさうの殿ならなる人くの出あひなどゝして、かうしなどもあけふゞら、ふれ歌をあうして、人のいでぬるのちも、ゑいだしたるこそをうゝれ、ふ的などたまして、いとをうゝ、笛ふどふきて出ぬるを、我ハいそぎてもねられぞ、人のうへなどもいひ、彩などかうりきくまゝに、ねいりぬるこそをうゝれ、

雪何の山ふ　百五十三段

雪れいとたうくいあらでうそらうふりたるなども、いとこそをうゝけきゑ、雪のいと高く降

笛なとふきてハ彼ら へる人のふく也。

あこれなるものをろ
しきもハ世中の哀
なるすゑ面白きすゑ
とともものさまろ。

つみさるタぐれ
人二三人ぢろ火をけ中ふすゑて物ぐさりな
どまるわどよくらうなりぬれバ こなるまゑ火
もともさぬふ火ろ雪の光いと白うゑえたる
ふ火ぢ ちてぢひなどかきすさびてあいれな
るものをろ きものひあゑすることをろ
ふひもるぬらんとおもふわどふくりの和と近
うきこゆれバあやしとゑ出したるふ晴くろや
うの和おぞえなくゑゆるくなりろ ろふの雪
をいろふとゑひきこえながら あんでふことる
さハり をふくらつるふしなどいふ 今日こ

おゑなくこもる
ハふとをりく来か
ふふ人也。
なんでふすゑさて
りハ何この故障ま
て今まゑりしとの
ゑ也。
今日こん人をハ拾
遺集ふ山里ハ雪ふ
りつみて道もなし
今日こん人を哀と
ハこんとある歌也。
さらふさハ園庭也
内も外もハ内
の女方も来たる
男ものさまろ
あけくれハ夜あけ
んとてたぞしくら
くなるをいふ。
雪何の山ふハ朗詠
ふ暁入梁王之苑雪
満群山とあるをい
ふなるべし。
雪月花のときハ朗
詠ふ琴詩酒伴皆抛

ん人をなどやうのすぢをぞいふらんろし ひる
ふりあるすつるすどもをうちをドめてふろづの
るをいひひらひ わらふざさ出されど かさつ
ろたのあハ ハろもあぐらたるふ かぬのはとの
きこゆるまでふなりぬれど 内も外もいふすど
もハあろずぞおぞゆる あけぐれのろどふろへ
るとて 雪何の山ふとてるとうちずんぢたるハ
いとをろ き物なう 女のろぎりもてハ さもえ
るあかさぢらまをしを ふなるふりハ いとをろし
うすきたるありさまなどをいひ合せたる。

雪月花の時　百五十四段

我雪月花時最憶君とあるを奏したるまてらやうのさうも我君を思ひ奉るとのことなるべし。

村上の御時、雪のいとたかう降りけるを、やうきふもらせおひて、梅の花をさしてに、月いとあかきに、兵衛の蔵人ふさびたりけるを、雪月花のときとそうしたりけるこそ、いとをかしうめでさせおひたれ。うちなどよまんふさはしのつねなり。かうわふあひたるをなんいひがさきとこそおもせられたれ。

すびつの煙　百五十五段

おなじ人を御供にて、殿上にさぶらひざりけるわど、さゝずませおはしますに、すびつのそばのたちけるを、のきの御のそばにて、ことおもせられたれば、こたへ申りまゐりて、

わらつみの、おきまよこがるゝ、柏木はこれをあまれつりたてゝ、へるなりけり。

とそうしけるこそをかしけれ。かへるのとび入てこがるゝなりけり。

ともあきらのおほきみ　百五十六段

こあれのせんゞ、五寸バかりなる、殿上わらはのいとをかしげなるを、ほくりて、みづらゆひ、さうぞくなどうるはしくして、名をきてたてまつらせたりけるを、ともあきらのおほきみとかきたりけるをこそ、いとをかしうせさせおひたれ。

ことあまのせんゞハ、万歳云檀紫なる齋院宣旨の類なるへしみあれハ齋院のたろしめすなれハ、齋院の女官をかくいふならん。

こうらハ、髻也。

いとをかしうせさせハ、御鏡をかし給ひしと

ことつみの云くの歌ハ、沖を爐にかけて蛙の火にこがれたるをいとんとてよめるなり。

同じ人ハ、兵衛蔵人をいふ也

の意也。

これをとあり云くハ。繪のいとをれを中宮の仰せきりまゐるなるべし。

さゝつきゝまゐりたるおゝとのあぶらハ。高坏ゝともしたる燈也。よの常の灯臺ならで。ひき〳〵ゆゑ。髪の毛なともふく見ゆとの意也。

いみじう白ひたる

云くハ。つめたき故中宮の御手の赤みて。色のうつくしきをいふなり。

いらてすちゝひてもハ。何とゝして真向ならてそゝめても見えまゐらせんとの意也。

御格子もまゐらすハ。格子明けぬをいふ。

まそなと仰せらるれハ。暫格子をあくなの意なり。夜明ぬとならハ。淺少納言の帰るへけれハとそなるべし。

ふひまゐり　百五十七段

宮ふをゝめてまゐりたるに。物のをづゝしきるかぎりならず。涙もわちぬべくれたゝるくまゐりて。三尺の御几帳のうしろよりぶらふよ。袂などとり出てゝ。せのふさゝよもえさし出まじうわなし。これハとあを。かれハゝゝをなどのめるするふさゝつきふまゐりたるおゝとのあぶらなれバ。かみのもぢなども。中々ひるよりハけせうふゝえてまゝゆけをゝどねんゝて見なども。いとつめたきころなれバ。さし出させぬくるゝを。れわづゝゝゝゆるゞ。いみじう白ひたるうもゐ

梅なるハ。ゝぎをるくめでたしゝとゝんしらぬさとび心地ゝハ。いゝゝゞハ。かゝる人こそ世ゝおハしまし〳〵れと。おどろゝるゝまでぞまもりまゐらまる。曉ゝハとくなどいそゞるゝ。かつらきの神もゝだしなどおゝせらるゝを。いゝてすぢゝひてもゝらんぜんとてふしゝれた。御かうしをまゐらず。女官まゐりて。これをふさせぬくといふを。女房きゝてをなゝをまそなどおゝせらるれバ。わらひてかへりぬ。物などとをせぬひのゝさまをするゝ。久しうなりぬをバ。おりまゐしうなりぬらん。さハをやとて。よさりハとくと仰せらる

よさりハ、宵ヨハの意也。
あけちらしハ、内前より清少納言の座るやいなや格子を明放ちたる也。
このつゞねあるドハ、清少納言のひるハ宿りゐさる局のあるド也。
いとあへなきまでハ、彩条の清少納言をあまりなるまで召まろもせ給ふハ、后宮の内心こそあらめとの意なり。
たゞいそがしくいとすハ、進め出すせ。

る。おざりかへるやおそきと。なけちらさるヨ。宣いとをゝし。そふハひるほゝさまゐれ。宣ヨくをりてあらハヨもゐるまゝなどたびくめせど。このつゞねあるドもさのみやこもりゐゐらんとする。いとあへなきまでにまへゆるさをたるハ。おゞしめすやうこそあらめ。ゐふヨさゞふハすくきものなゞとく。たゞいそがしくはそゞしいだせバ。わをまもあらぬこゝちをするものから。まゐるもいとぞくるしきや。火たき屋のうへヨ降つゝさるもめづらゐうをゝし。内まへちゝくハ。れいのまびつの火こちさくおこして。それふハわざと人をゐも。宮ハちんの内火をけのなゝゐゐちさるヨ。むゝひておいハします。ゝらふ内まゝなひゝぬひけるまゝに。ちゝくちぶらふ。つぎれゐふなゞすびつヨまなくゐさる人々。からきぬきされさるわどなり。やすらゝなるをみるもうらやましく内ふとりつぎ。たちゐふるまふさまなどつゝましけならバ。物いひゐこわらふ。いつの世ヨりさやうふまじらひならんとおもふさへぞつゝましき。あうよりて三四人つどひて。繪など見るもあり。志ゞゝ物りて。内きさゝうおふこゐすれバ。殿まゐらせぬ

ちんのひをけのなゝゐハ沈の火桶也。なゝ繪ハ。梨地の類なるへし。
まゝなひゝけるハ。茶才宮の内介錯なとする人なれハ内前ちゝく侍る也。
やすらゝなるをハ。清少納言のうひうひゝきふ人々の宮つゝへ馴て進退安けなるゝ羨しとの意也。
内ふとりつぎハ。一本ハ内侍文とあり。内ふハ中宮の内封ふて封戸也ともいへり。
いつの世ふゝ云くハ。いつさやうふ仕へなれとの意也。

あうこうてい、奥へふなりとて、ちりたる物ども取やるなどするゆ、わくゆゑ引入て、さすがゆゑきなりとて、ちれ帳のかころびよりわづらゆ見いれさり、大納言殿はまゐらせゆふなりなり、ちと直衣さしぬきの紫れ色重ゆえてをうしそしらのをこゆゆひてきのゆゆふ物いみまて侍れど、重のいさくふりて侍をだおおつうなきになどのゆゆふこちもなしとゆひけるゆ、いうでうとぞちいらへあなるうちわらひゆひくおいをとやちらんずるとてなどのゆゆふ法ありさまい、これようい何事うまさらん、物語ゆいみどうロゆまうせていひたるゆども、さぐいざめりとりとおびゆ、ゆいろきちぞどもにゆのうらあやこつ、白きからあやと奉るさる、ちぐしのかいらせゆふるなど、ゆゆうきたるをこそ、かいるゆいえるゆ、現ゆいまだちらぬを、愛の心ちぞまる、女房と物いひさたふれなどしゆゆをいらへいさいうちづうしともゆひうかくるを、ちらぐひ強どなどきこゆるい、めもあやゆ浅まーきまで、あいなくおもてぞたうむやきくど物まゐりなどして、ちまへゆもまゐらせ強ふ法れ帳のうしろなるい強そと問ゆふなるあるをいふなり、さうもざめりとおぼゆいふ此伊周公のさまを見るうげふ者物語ふさまくくのうへを法めーゆもうすとゆえゆもとの言也、現ゆいまさい、現在ゆうやうの法ありさまいいまさこねい、愛うと思ふとのきちう、めもあやゆい、目も後うくて目も及たれおとうちるゆ也、法少納言の初くしくて恥きたるべし、

さちておたするハ、伊周公の清少納言の方へおとする也、外へやハ、さて外さまへおとするふうと思へるこの事也、

漆ふさありしハ、実ハ清少納言を思ひてありしとぞ、ふれのゝまふなるべし、

よそふとやり奉るたまハ、前ハ几帳の綻ひうり僮ゝ見入まゝしたふふの事也、行幸なと見るふハ、年来行幸なとゑし折ふ伊周公供奉ゝて清少納言の物見る車を見おこせ給ひしさハのこと也、

おかけなくハ、夏先べし、ちぞを申すふこそならめ、さちておをするを、外へふやならんと思ふ、いとちうるゆひて、物ふどのゆふ、まざまるらざつゝ時、少おきゆひけるなどのゆふ、まことふさ有しなどのゆふ、清几帳へざてゝよそゝやまるだよそふふ、清几帳へざてゝよそゝやまるだよそづゝかまつるを、いと淺ゝうさしむゝひきこえさる心地ゝとも、おぶえぞ、行幸などゑるふ、車のかゝふいさゝゝみおこせゆふハ、下すざれひきつくろひ、すきさろげをやとあふぎをさしかくを、怪いと我心ゆがらもおかけなく、いゝで立出ふしぞと、おせなうえていさゝきふ、何ふをかきあくまて恐多くもなといふことなり、かしこきさけと云々ハ、我顔をゝくす、ゝたゝけなき影と頼ミたる扇さへも、伊周公の取給へるふとめを也、

ふりこのくべき髪の云々ハ、扇さへとられ、れハせめて面ゝくしふ、髪をふりかけんも見くるしからんと思ふふとの事也、

さるけゝきやハ、恥たる心の顔ふもや見ゆらんとの事也、白きものハ、白粉をいふ也、

ろんなうハ、勿論の意也、

こえん、かしこきゝげとゝゝげたる扇をゝべとりめへるふ、ふをゝくべきかみのあやしさゝへ思ふふ、すべてまことふゝるゝしきやゆきてこそえゆらめ、とく立めへなどおもへど、扇を手まさぐりふして、繪ゝとがかきたるぞなどのゆひて、とみふもさちめるそぬゞ、袖をおしあてゝうつぶしゝるゝ、からきぬふゝいをのうつりて、まぐらふなゝらんゝしゝ、ゝうるゆひたりつるを、ろんなうくるしとおもふらんと心ゆさせゆへるふやこれえめへ、見ハさがかきたるぞときこえさせゆふをうきしと思ふに、ゆひてえ伝らん

給ひて云くハ。これへ給ふてのこと也。

身のわと云くハ。淺少納言今世歳半ふやありけんゝやうの今めかしき戯い年齢ふも身のわとふも相應せもとのこと也。

人のさうかながきたる紙。草假名ありて宸宮の見せ給へる繪草紙のゆなり。

淺ゞふゝあらんハ伊周公の詞也。

一所さふあるふハ。伊周公一人さへ恥じきふその上のこと也。

図ー直衣の人ハ。中納言隆家卿なるへし。

これハ以下ハ。女房達のさま也。大殿さ殿ふりもなれてきこゆる也。

さるゝうハ。猿樂ふてされてこと也。

これも何ゝしらハ。此詞上ふつゝゝらも。若し淺字なとあるふや。

狂いとへんけの物ハ。淺少納言のうひくしき心ふハ。変化の物天人なとやうふ見えしとのこと也。

いゝふゝてとハいらてゝハ思ひ奉らざらんとのこと也。

たいこん所ハ。宸宮の女房の侍所也。

と申しぬへバ。狂こゝへとのさまハもきバ。人をとらへてさて佐らぬなりとのゆふいと今めゝしう身のわど年ふいあハぞかさいらいさし。人のけうゞなかきさる草紙とり出て佐らん沢逢ゞふゝゝらん。かれよ見せさせゆへ。それぞ世なる人のをハえをりて佐らんと。なやしきゆどもを。呂いらへさせんとのゆふ。一ところどなるふ。又ちきうちおハせて。おなじふやしの人まるらせゆひて。これハ今すこし花やぎ。さるゞふゆなどうちし。やめわらひ無ド。われも伊ゞしゞとあるゆゝゝるゆなど。殿ふ人のうへふど申すをきけで狂いとへんげの物。天人などの物ありきたるふやと見えてしをちぶらひなれ。日比もぐれバ。いとさしもなきさざふこそるゝれ。ゝくゝる人くも。家の内出そめゝんわども。さこそい見えけめど。ゝくゝもてゆくふおのづゝらおもなきぬべし。物ふど作せらもて。我ををおもふやとをせゆふ淺いらへふ。いゝよりハとけいもるふあそせてざいそんれ。れバ。あふ心うそらごとするなるもりゝふしゝとていらせゆひぬ。いゝでゝそらごとふそならん。よろしうざふおもひきこえさすべきゆかそは

そらことする也けりハ。思ふとハ偽なら
ん。隣まそ嘘これハと戯れ給へる也。
ふろ〜うだなハ大方ふさふのさ也。
ひらさるとりもハ。人のえなひとる時又えなひ返さねハ
ひろ〜といふこと世俗まもいひなら
えせるをなるべし。
えんなる文ハ后宮の侍文也。
いろまして云くハ。偽ならすといふ
をいふふして云ら
ん若し偽を礼の神
あらそこそ知もへ
々れとのさ也。
后けしきハとハ后
宮の侍気色かく也

おこそハそらごとと云々れとおぼえてさてそ〜
をゞかくふくきわざ〜つらんと大うさ心づき
あしとおぼゆれだ。わゞはる打もおし〜ひ〜ぎゃう
へ〜てあるをまして〜ふく〜とおもへど。まゞう
ひ〜云々れだ。ともかくもけい〜ふほさで。ぬ
れバおまたるすふいち。なきみどりなるうまや
うふえんある文をもてきたり。これバ。
いろまして。いうまちまし。いつそうをそら
にさゞまの神あらりせで。
となん。侍々〜きハとあるふめでさくもにを〜
くもゝひとゞるゝにふよべの人ぞさづぬき

と。右京のそへさる河なり。
よべの人そハうの
ちなひさる人をい
ふ也。
うすきこそハ薄き
思ひこそちなき
嘘なとふも好けら
るへ々れこれハ真
実なる故ふ偽と思
召れんそうき身
の不幸思ひ知られ
て侘〜きとのさ也。
志きの神ハ戦神と
て呪咒なとふまう
て災をなす神なり。
祈〜もなとてハ其
をうしも嘘たるを。
いろてさやうふあ
りけんとあやしむ
也。
志さうろなるハ。

うまわしき。
うすきこそ。我れふもまらめ。はな故ふ。うき身
のわどを志るゞわび〜き。
程こをバうりハ。けい〜なわさせめへ。志きの神
もおのづからいとら〜こ〜とて。まゐらせての
ちも。うたて。打〜もあどてさはたあまゝん。いと
をう〜。
志さうゞわなるもの　百五十八段
正月一日のつとめて。さいそまえあひたる人。
きしろふさびの蔵人よかふ〜うする子ふ〜た
る人のゝ〜き。　除目ふそれ年の一の國えさる

慢したるこそ也。
正月一日のつとめて云くい世俗ふ元日をなひるハ長命の相といへこそ也。きしろふさひのハ。貴人の闘をあまたぬ望み爭ふ時のこそ也。
いとことやうふかろひてハ。呉樣ふ比ひて外國ふ沈淪するものをめこそ也。受領ハ鈴庭奉公の志ある人ハ本ことせす。唯所務得分ある故ふ望むなり。さるからふことやうふ云くといふなり。けんさハ供驗者也。るふさきハ掩韻也。そを推あてたるを明けといふ也。ふくつけさハ貪りうまーきこそ也。

人の。ふろこびあどいひて。いとかーこうなりぬへりなど人のいふいらへふ。何ろ。いとことやうふほろびて侍るなれバなどいふと。ちろうぐわなり。又人おかくいどみさる中ふえられて。むこふとらもたるも。我ハと思ひぬべし。こをきおのけてうぢふさるげんざ。るふさぎの時とうちさる。小弓いるふ。かさつうされ人。ちいぶきをーまぎらいしてはもぐふ。ねんじて音高うるてかてさるこそ。ちうりぐわなるけちきなれ。ごをうつふ。さだかりとちらでふくつけさハ。又ことふまかゝぐりかりくふ。ことかさうめもなくして。おろかくひろひとりさるもうきーうらじゃ。かこうりうようちわらひさぶのうちよりハかこうりうなり。ありてずまやうふ成さる人のゝーきこそ。うきーげなれ。どづうふあるぞんざの。なめげふあふづるも。ねさーと思ひ聞えふぐら。いうゞせんとてねんどるーつるふ。我ふもまさる者どもの。かーこまりたゞ作うけたまいらんと。つるさうするさまえ。あまーー人とやいえうえさる。女房うちつうひ。えんざりし調度ちうぞくのわきいづる。ずまやうちさる人の。中将ふなりたるこそ。もときんざちのなりあゞりさる

もとうりの公達ハ。摂家大臣の息子さ

つるさうハ。退後也。

てハ近衛の中少将をへて、納言以上なのゐる人々をいふ。

受領もさこそハ。受領も大上國の守ふなりうしいこよゐしとのこと也。

あまゝ國ふ行てハ、數多他國の受領を經て、合格の人をいふなり。

上達部ハ、宰相以上をいふ也。

ふりをけざうう志さりがゐよ。いみじうゐひさめも。くらゐこそ物めでさき相ふこあれ。同じ人ふぐら。大夫のきみや。侍從の君などきこゆるわハ。いとあなづらつるやもきあを。中納言。大ふごん。大臣などふなりぬるハ。むげふせんゝこあく。やんごとふくおぼえゐふすのこよふさよ。ゐゝゝ

ふゆゝてハ。受領もさこそハあめも。あまゝ國ふ切て。大貳や四位などになるて。上達部ふなりぬきバおもゝしゝ。ちもどさりとて。ゐどすぎ。ふふでゝりのゐゝハある。又おゐくやハある。ずもやうのゐのうたふてくぐるこそ。ふろしき人のさい

又多くやハ、大貳四位なとふなるハ稀なりとのこと也。

猶男ハ云々ハ、女の后ふなり給ふより、猶男のなり出たるハ志さりゐふなりとのこと也。

何らしぐふハ、内供奉の禪師なとをいふなるべし。

何とゐとえるハ、まそもなゝとのこなり。

ありゐくりハ、形懸り斗こそつくろへ。何のゐひもなゝとのこと也。

をひふハ忍ひてあめれ。たゞ人の上達部のむめふて。后ふなりぬふこそめでさゝれ。されど猶男ハ我身のなり出ることそ。めでさくうちあふぎたるゝしきよ。法師の仏ゞし供奉などいひてありくあどい。何とゐえゆる。經さふとくふみ。ゑめきふげなるふつけても。女ふあなづられてなりかゝ。ほこそすも。僧ふ成ぬきバ。佛のあらハきめへるふこそと。おぼしまどひて。かしこまるさまハ何ふゐハ似さる。

風を　百五十九段

あらし。こゞらし。三月バゐりの夕暮ふ。ゆる

く吹さる色ゝぜ。いとあハれなり。八九月ごろ
りふ。雨ふまじきてふきたる風。いとあハき也。雨
れあしふこさまふはとゞしう吹たるふ。夜とゝ
しさるわさぎぬの。あせの香ふどかとき。すゞし
のひとへふひきさらさねてきたるもをゝし。はす
ぐだふいとあつゝハちうすてまゝしゝりし
ゝゞ。いつのまふ。かう成ぬらんと思ふもをゝし。
ゝゝつき。かうしつまゞふどおしあけさるふ。
嵐れさと吹わさりて。かゝふたみさるこそいと
ゞうをゝしゝれ。九月つごもり十月一日の程
の。空さうちくもりたるふ。風のいたう吹ふ。黄なる

夏とゝしたるハ。一夏を通したる綿絹也。

此すゞしさふ云くハ。夏のあつゝりし種ハ。生絹さふあつくるしうありしふのさ也。

野分ハ。八九月頃ふく暴風さいふ也。

桐子のつゝハ。桐子のひとまくを坪といふ。次の句ふこもゝくと吹入とあるとも思ふべし。

こきゝぬのくもり

木の葉どものゝろ〳〵とこゞれおつるいとあハれ也。櫻の葉むくの葉ふどこそおつれ。十月バかりふ。木立おゝゝるゝの色ハ。いとめでたし。野分の又の日こそいみゞう哀ふたゞゆれたてゞ。とゝ。すいゞいなどのふしなみさるふ。せんざいども心ぐるしげ也。おゝきかる木どもさふれ枝などゝ吹をられさるゞふをしきふ。萩女郎花などのうへふ。よろゞひてひふせる。いとおもしろなり。桐子のつゞなどふ。さときたをことゝちらふ。さらんやうふ。こまゝと吹入さるこそあらゝりつる風の志とゞさともおゞえね。いとこさ死ぬの

たるハ、こき紅の上のくろみたるをいふせ。

ぬさめつるをハ、一本ふねられさりつれハとあり。久しうねおきたるハ、朝寝しておきさるまゝの髪也。うちふくさみさるハ、髪のそけさちるをいふせ。

花もゝへりぬれハ、縹の色さめて雨さぬるゝさる也。うす色のとのゐ物ハ薄紅のさるの着もの也。そきす髪ハ、髪のすそのそろへるをいふ。さけそりハ、その長くて居長なと裾ふわまりさる也。ねこめハ、草花のねくるめ吹折れさるをいふ也。うしろもハ童の後手也。

うハぐもりさるふくちもれおり物、うせ物などのこうちき着て、まことゝくきさげなる人の、ふるい風のさゝぎふ絲ゑつれた、久しうねおきたるまゝに、鏡うちゑんて、もやうまこゝるざり出さる。髪ハ風ふ吹まゝいされて、すこゝうちふくだみさるゞ、かさふかゝ、ゑさるわゞ、まことふめでたし。物あいれあるゝ、きゑんるゝに、十七八だうりまやゝらん。ちひさういあらねど、わざとおとなゝどハゑえぬゞ、すゞしれひとへのいみじうわころびさる花もゝへりぬ生などゝたる、うそいろのとのゐ物をきて、かさを、をなれやうなるそぎするゝも、さけバゝりハ、きぬのすそにをづれて、をゝ波のゝみあざやゝふて、そバゝりゑゆる。わらをべの、わゝき人のねごめふ吹をられさるせんざいゝをとりあつめ、おこゝたてゝどするをゝうらやましげふおゝはゝゑて、つきそひたるうしろもをゝし。

百六十段

心ふくき物　物へざてゝきくに、女房といおぶえぬ殿ゝの忍び やゝふきこえさるふ、こゝへ若やゝふゝして、うちそよめきてまるゝゝいひ。物まゐる程まや、をゝしゝひなどのとりまぜてなゝたる、ひさげのえ物まゐるハ、ゝ膳進る也。をゝしゝひハ箸匙也。ひさけのえハ提柄

也。

さうさうしうハ、さとうしくの音使也。

このハ、釣の竿簧をつりうくるもの也。

をしのハ、火箸の也。

のさふれふもも耳こそとぶまれ。うちさるきぬのあざやうなるふ、ちうぐしういあらで、髪のふりやらをたる。いミドうきつらひさるふの、おれとかぶらいまるらで、去すびりふ、いとれれくおこしたる火の光ふ、ほれ帳のひをれいとつやゝうふえ、みものもかうのあげたる、これきをやうなるも、けざやうなつゆ。ふくてうドさる火をけの、そひきよげよおこしたる火ふ、ふくうきさる繪のええさるをうし。をしのいときいやうふ、すぢかひさるもをうし。歯いさうを、て、人れみかねぬるのちよどのうさまて、殿上人

こいしけふハ碁石を碁笥ふの意かう。

ちぢ物いふふ、おくにご石けふいる音れあまるさ聞えさる、いと心ふくし。をのこふ火ともしたる。物へざてゝきくに、人の忍ふるゞ、夜中ふどうちおどろきて、いふすハゆえを、男も忍びやうふうちわらひたるこそ、なるすあらんとをうしく。

百六十一段

たまハ、

うきたま　やそしま、たハ生嵩、みづたま、松ゞ浦嶋　まゞきれ嵩、とまらの嶋、たどしま。

百六十二段

そとのたまゝ。ふきあげの濱。なゞハま。うちでの濱。もろよせのたま。千里のたまこそ。ひろうおもひやらるれ。

浦ハ　百六十三段

をふのうち。志ゐゞまのうら。志賀れうら。なゞろれ浦。こアまずまのうら。わゝのうら。

寺ハ　百六十四段

つゞさゝ。かさぎ。わうまん。高野ハ。こうゞう大師の志すゝなるゞ。あたゝまなるなり。石山。こゝを。志賀。

経ハ　百六十五段

つゞさゝハ。和泉の法華寺也。又壺坂寺といへり。

粉川寺ハ。紀伊國也。

千手経ハ。千手陀羅尼経なるべし。

すいく経ハ隨求陀羅尼経也。

あそゝの大すハ。阿弥陀の大呪真言也。阿弥陀根本陀羅尼ともいへり。

せんすたらふハ。即ち千手経の中ふあり。

文集ハ白樂天の文集なり。

申文ハ。官を望みて除目なとふ上る文をいふ也。

如来ハ。大士の相好をいゝ。即ち六臂身金色住説法おゝ右

法華経ハ。ちなり　千手経。ふゞん十願。すいぐ経。尊勝ざらふ。石みゞの大ず。せんずざらふ。

文を　百六十六段

文集。文選。をろせの申文。

佛を　百六十七段

如来ハ。人の心をおゞしわつらひて。つらづえをつきておハもる。せよちぞあいまをふをづゝ。千手。すべて六觀音。不動尊。藥師佛。志やゝ。みろく。普賢。地藏。文殊。物ゞたりを　百六十八段

第一思惟第二持宝珠第三持念珠左第一按光明山第二持蓮花第三持輪とある第一の思惟の手ハ慈会有情故と有をかくいへるなり 住吉うつゝハ今の世ふつゝとも殿うつゝハトの物語ハ所見なし

そうけのハ何れの國ともなれどもしきつけたるハいゝてさやうふハ名付けんとのこと也

住吉。うつゝのるゐ。殿うつり。月まつ女。かさのゝ少将。梅壺の少将。人め。國ゆづり。うもと木。ろんまくむる松ゞ枝。こまの物語ハ。ふるきかたりぢ出てもいまゝゞを。らしきなり。

野ハ　百六十九段

嵯峨野さらかり。いなび野。かさ野。こま野。あはづ野　飛火野。ちめゝ野。そうけ野。こそをぞろふをらゝれ。などさつれさるゝ。あらん。あべ野　みやき野。かもゞ野。むらさき野。

陀羅尼ハ暁ハあらつきふるむぢゝろゝしとのこゝろなるべし

どきやうハ看経ちとなるべし

あそびハ音楽をいひ又ゝろづの遊伎をもいふなり さまのあゝれども蹴鞠のさまなるべし

するゝまひハ東遊をいふ也 もとめこハ求子也

陀羅尼ハ　百七十段

あかつき。どきやうハ　百七十一段

夕ぐれ。あそびを　百七十二段

ゝる。人のかゝ足えぬるゝど。あそびわざハ。ちまあしけれども。まりもをらゝ。こゆみ。ゐんふさぎ。碁。まひを　百七十三段

するゞまひ。もとめこ。さいへいらくハ。さまあしゝれどいとをらゝ。太刀などうたてくあれ

うたさふぐしてハ。漢高祖楚項羽と鴻門ふ會せし時項荘のまひしを太平の曲といへて其折のさまをかくいへるなるへし。

ととろハ。技頭也。

らくそんハ。落蹲也。

納蘇利ともいふ。

こまうさハ右方をいふなるへし一本ふ狛杵ともあり。

さうのことハ。十三絃をいふ也。

ふうてう云々ハ。鳳香調黄鍾調龍香急春鶯囀想夫憐也。

ど。いとおもしろし。ところ〳〵に。うさきふぐして。

ゆそびくんなどきくに。　多けまひ。　ぢとうハ。

かしらのうみふりうけたる。まみあどハおそろ

しくれど。がくもいとおもしろし。らくそんを。

二人ちてひざふくてまひさる。　こまうさ。

百七十四段

引ものを

琵琶。　ちうのことを。

百七十五段

ちらべを

ふうでう。　わうちきでう。　そかうのきう。

ぐひをたさへづりといふちらべ。　さうふれん。

笛ハ　百七十六段

ふこぶえいとどうをうし。遠うよりきこゆるど。

やうくちうなうゆくもをうし。ちう〳〵至ぬる

ど。をるうなりて。いとなのうふきこゆるもい

とをうし。車ふてとかちあてもるあてもすべて

ふところふさしいれてもたるも。何ともうえぬ。

さバうりをうしきおれあしまして。きゝちうた

るてうしなど。いとおうめでさし。あうつきなど

ふ。忘れて。枕のもとふありたるをえつけたるも

なををうし。人のもとをりとりふおこせたるを。

おしつゝみてやるも。さど文のやうふえてう。

ちうのふえハ。月のあうきふ。車などまてゆえ

何とも見えすハ。目ふさゝぬ也。

あうつきなとふ云やハ。忍ひてきたる男なとの忘れおきたるなり。

さうのふえハ。笙也。

たる。いとゞうをゝし。ふせくもてあつゝひふく
くぞろゆる。ふく顔やいゝふぞ。ぢれいふこ笛も
ふきなゝありゝし。　ひちりきハ。いとむつゝし
う。秋の虫をいたぶ。くつゝむしなどふ似て。うゝ
てけぢゝくきうまゝしゝらぶ。まゝてわろうふ
きたるを。いゝゆくにくきふ。ゑんどのまつり
の日。いまぐおもまへふ出をてゞ。物のうしろまて。
よこぶえをいとゞう吹さてたる。あなおもしろ
ときくわどふ。なゝらバゝりゝうゝうちそへてふ
きのぶせさるわどこそ。さゞいみどう。うるハし
きかみもたらん人と。みふたちわゞりぬべきさ

ゑんしの祭ハ。賀茂の除時祭也。

うるはしき髪云々ハ。笛をおもしろく吹出ぬ也ハ。奥さめ

て身の毛もよだつとの意也。

清賀茂詣ハ。関白參詣。卯月申日まて。必賀茂祭の前日ある也。

ちぞまる。やうゝく琴笛あハせてわゐ出たる。い
とゞうをゝし。

見るとめたる　百七十七段

行幸。　まつりのかへさ。　清賀茂まうで。　ゑんゝ
どのまつり。　そらくとりてさむげなるふ。ゆき
もこしうちちりて。かざしゝ花あをずりなどふ
かゝりたる。えんもいとぞをゝし。たちのさやの。さ
ハやゝふくろうまざらまて。ちろくひろうええ
たるふ。ちんひのをの。えうちさるやうふかゝまま
たる。ぢずりバゝまの中より。こゝろゝとおどろ
くだうりなるうちめなど。すべていとめでたし。

ふせ。

菊の花ふい。菊の花のゝさ〜をいふせ。

かもの社のタ襟い。古今集ふ千早振賀茂の社の木綿襟ひとひも君をゝけぬ日いふしとある歌をいふせ。

かうゞ〜しうい。神々〜くせ。

今すこ〜おゝくわ〜さらせまゐ〜きふ。使い必ふ。くげなるもあるたびいめもとまらぬ。されど菊の花ふゝくさをたるゝどいをゝもう。枝るぬるゝたをえおくるゝふ。べいおうのもゝおくれたる。柳のもゝ〜ゞさねふ。かざ〜の山吹おもかくえゆゑども。扇いとたゝくうちなゝらして。賀茂の社のゆふぐさもきとうさひさるいとをゝし。

ゆゑにおぞらふるものい何ゝゝらん。もこ〜ふさてまつりたるを見まゐらせたるい。あけくれ清あふさぶらひつゝうまつるすもおぞえぞ。かうゞもういつくしう。つねい何ともなきつゝ

ひめまうちきみい。東堅子也。こつなのすけい。風輩の御綱を奉行する大舎人助をいふなるべし。

うちなえてい。打萎みて也。

さ。ひめまうちぎみさへぞ。やんごとなうめづらし〜うおぞゆる。みつなのすけ。中ゆゐあどいとをか〜。まつりのゝへさ。いこどうをゝ〜きのふたをふろづのゝうるくしうて。一条の大路のひろうきふらなるふ。日のゝゝげとあつく。車ふさしいりたるもまだゆけをバ。扇ふてかく〜。ゐなゐりふどゝて。久もゝうまちつるもゞぐる〜うあせなどもいえしを。けふいいとくをてゝ雲林院ちそくゐんなどのもとふさてる車ども。葵ゝづらもうちふえてゞゆ。日い出されど。空い霧うちくもりたるふ。いゝできゝんと。目をさま〜おきゐ

あまたさきへあるふやとは、糸ふハ稀なるふのこと也。

かれふ似ぜんハ、郭公の髪ふ似ぜんとのこと也。

まゞむごハ、未各期ふていつともなしとのこと也。

たゞしハ、腰輿也。これふ奉りてハ、齋院これふ乗りておそすらんのこと也。

もるうげふハ、各期ふ久〳〵といひたるてまゝさるゝ郭公の、あまたさへあるふやときこゆるまで、なきひゞゝせだいみゞうめでたゝと招もふわどふ、當の老たる髪ふて、彼ふ似せんとおゞ〳〵くうちそへたるこそ、ふくゝれどまゝをゝ〳〵いつ〳〵ゝとまつよ、社のゝたゝゝあゝきぬふどきたるものどもふどつれゞちてくるを、いゝふぞ、ことたなりぬやなどいへバ、まゞむごなどいらへて、ほこ〳〵さゞしなどもてゝへる、これふ奉りておそ〳〵まそらんもめでゝくゝけぢゝくいゝでほるげもなどのさぶらふふゝとれそゝ〳〵ふるうげふいふわどもふくかへらせぬふ

程もなくのこと也。青ほ糸ふともハ、出車の女房の出たちなどなるべし。

高院の思ん〻ハ、高院の饗の垣下ふ奉るなるべし。垣下とハ、大饗布とゝもゝ人数の外の人の交りたるを垣下の君達といふ也。

あふひよりたゞしめて、青くちなどものいとをゝ〳〵ゝゆるふ、ふの衆のあをいろちゝげさねを、けゝきぞゝり引ゝけさるハ、卯花垣根ちゝうおぞゆゝ〳〵きのふハ車ひとつふあまゝさのりて、二あるのなほ〳〵あるハ狩衣など乱もきて、簾取おろ〳〵、抱ぐるほ〳〵きまでえゝ〳〵君達の、齋院の思んゞふて、ひのさうぞくうるハ〳〵くて、〻ふハ一人づゝ、をさ〳〵ふく窓たるちりふ、厳ふわらをのせたるもをゝ〳〵、わさうをてぬるのちふハ、などゝほ〳〵もまどふらん、我も〳〵とあやふくおそろ〳〵きまでさきふさゝんといそぐをかうないそ

ぎそのどやゝふやをと扇をさゝ出てせいすれ
どきゝもいれねバ わりあゝて すこゝひろきゐ
ゐたひてとゞめさせてたちたるを心もとゐく
ゐくゝとぞゐひさる きほひかゝる車どもを見
やりてあるこそをゝしゝれ すこゝよろゝきゐ
どふやまゐゝて たの山里めきあハきなるゐう
つ木垣ねといふ物 れいとあらゝくちう おどろゝ
しげふちゝ出さる枝どもなどおゐゝるゐ花ハ
まざゝくもひらけてぞつゞみゞちゐ見ゆる
ををらせて 車のこなさかあさゐどゐ ふちゝたる
もかづらなどのたゞみたるゞにをゝきゐ をゝ

やりゐゝてい 我車をやりこゝてせ

かづらなどのハきのふ葵ふそへし 復

の志ゞみたるゝ 今卯の花の形ゝきらをゝゝとのさせ

こねふとゝろるゝハ 古今集ゝ風ふけバ峯ゝ別るゝ白雲のさえてつれなき君ゝ心ゝとある歌せ

うへハつれゐくハ 拾遺集ゝ芦根をふうきい上こそつれなゝれ下ハえならす思ふ心をとある歌をとれるなり

しうれゞゆ とほきゐゞどハ えもとゐるまゞうえ
ゆるゞゞさきを ちゝうゆきもてゆけバ ふゝもあ
らざりつるこそをゝしけれ をとこれ車の雅と
もちらぬゞ ちりふひきつゞきてくるもたゞゐ
るゝりハをゝゝと見るゐどゝ ひきわゝるゝ所
まて こねまわゝるゝといひさるもをゝゝ

夏の山里　百七十八段

五月ざゝり 山里ふあをくいみゞくをゝゝ 澤水
もげふさゞいとゐをくええわさるゝ うへハつ
れゐく草おひたゞりたるを なゝゞくとさゞばま
ふゆけバ ちさいえあらざりける水の ふゝうハ

輪のまひたちたる云くハ。一本ニまひたりけるニおきあがりてふとゝゝへたる香とあり。ちゝふゝへたるハ。蓬の香の間近く匂ひたるをいふ。いふへきニもあらすハ。先おそれするなとの人の車なれバ。優なるやいふも更なりとのこと也。

あらねど。人のあゆむふつゝて。とゞちりあげたるいとをゝし。左右ニなる。垣の枝などのかゝるを。車のやゝたふいるも。いそぎてとらへてをらんと云ふふ。ふとをづれてをぬるもくちをしゝ。もぎの車ニおしひしゞをたるゞ。輪のまひたちたるニちゝうゝへたる香もいとをゝし。

夕まぐみ　百七十九段

いこゞうあつき比。夕涼みといふなどの。物はさまあどれぞめゝしきニ。男車のさきおふいいふべきなるもあらぬ。さゞの人も。ちりのすゞれあげて。ふくりもひとりも。のぞてをゝらせていくこそ。いと涼しげなるまゝ。琵琶ひきあゝらし。笛のねきこゆるを。ゐていぬるもロをしく。さやうなるなどふ。牛のちりがいの香れ。あやちうゝぎちらぬさまなれど。うちかゞをたるゞをゝしきこそ。掲ぐるほゝゝれ。いとくらやみなるニさきニともしたる松の煙れ香の車ニかゝれるもいとをゝし。

ちりゝいハ。鞦也。

吳ゝうゝきちらぬハ。鞦の香なれハ也。

松の煙ハ。炬火の烟也。

其折の云く。一本ニをりの香の同し

五月の菖蒲　百八十段

五月のさうぶれ秋冬をるまでなるゞいみゞうちろみゝれてあやゝしきをひきをりあげたるふ。をりの香殘りてかゝへさるもいみゞうをゝし。

やうなるもいみじうをゝとあり。

今のゝりハ、今焼きしゝりのき也。

ゑふくろハ、鷹の餌嚢也。

かなまりハ、金椀也。

たき物　百八十一段

ふくさきためたるさき物。きのふをとゝひけふどハうち忘れたるゝきぬを引ゝづきたる中ゝ煙のみこりたるをいまれゝりもめでゝ。

月あゝき歌　百八十二段

月のいとあゝきゝ川をゝるゝゝバ、牛のあゆむまゝ。すゐしやうなどのわをてるやうに水のちゝるこそをゝ〳〵れ。

ねおきまてゝゝき物　百八十三段

法師。くだ物。家。ゑぶくろ。すゞゝの墨。をのこ。目。あまりおそきハ女めきたり。又ゝあはゝつきハ、酸漿也。

まりのやうなゝらんハおそろ〳〵。火桶。ほゝづき。松の木。ふぶきの花びら。るゝもう〳〵もゝきハおそきゝこそあめき。

みゝゝくてあゝぬべき物　百八十四段

ゝゝの物ぬふゝ糸。ゝうゝい。げゝ女の髪。うるたしくみゝゝくてあゝぬべし。人のむゝめのこゝ。

人のいへふつきゝ〳〵ゝき物　百八十五段

くりや。佐ひのぢう〳〵。ゝ〳〵きれあゝら忘き。かけゝん。童女。ゝ〳〵た物。ついたてゝう。ゝ。三尺のきちやう。ゝやうぞくゝゝゝる侍の曹司ハ侍の部屋也。

ゝけゝん、懸盤ゝて貴人の膳ゝもちふるものせ。

中のたんそうけ盤の次なるをいふ也。ひぢをりなるらういふ臂折廊也濱臣云臂折らういふ文集の折臂翁ふてらういふ老人のことふて即翁の字ふあて〳〵いふゝ折臂翁の繪をかきたる大桶とうけて見るへきなり。廊ふていひちいゝとあり

ちくさうぞいふ万歳本ふ或本竹王繪とあり。作り繪とあり〳〵を書ひゝめなるふやとあり

なえそみたるいふ着なれてなよ〳〵しく

ゑぶくろ。かゝらさ。かき板。さぶづし。ひさげ。てうし。中の盤。わらふど。ひぢをりたるらう。ちくわうゑうきたる火をけ。

清げなるをのこ童　百八十六段

物へいくるふきふげなるをのこ。さて文のそやうふるもちて。いそぎゆくこそいづちふらんとおぼゆれ。まさきふげなるわらはべふどの。あこめいとなざやうふいわらぢふえをみとる。けい〳〵のつやゝうなるゞかをにつちおゝくついたるををきて。ちろきうゝふつゝみたる物。もいたこのふさふ草紙どもふどいれてもてゆくこそ。いみゞうふびふせてえまゝ〳〵れ門ぢうなるふをわさるをふびいる〳〵に。あいぎやうふくいらへもせでいくものを。つうふらん人こそは〳〵はうらるゝ。

行幸　百八十七段

行幸はめでたき物。こき紋君ぞち車などのなきぞ。すこ〳〵はう〳〵たき。

わびしげなる車　百八十八段

ふろづのすゝりも。わびしげなる車ふはうぞくわろくて物ゑる人いとゝもどう〳〵。法経ふどいとう〳〵つみう〳〵ふうろくのすゝあれバ。それどふ見ゐるをいふ。けいしいふ屐子ふて革付のたき物也。つうふらん人いふ。其従者の主人をいふ。車なとのなきぞいふ。行幸ふい。公卿ふ下徒歩ふて供奉ふれハさひ〳〵とのさも也。法経なといふ。法経聴聞の車なとい後世のさめさまて風流ふ華麗なりても

よきをそれさふのさをろう

何しふなといへふ人ふ劣るさまなるてい何しふ物見ふ出たるそとのきも。

さて見るらんい見苦しくていい見るそとも。

ゐたりい車の簾を居張る也濆居云ゐたりハ居をひこりのさなのらんゐ居張るといふるいふ。せつハつ云くハ車の打續きて来る也。

すゐたんい水飯ふて湯つけふしやうの物なり。

馬の口なとしてハ馬の口をとる也。

まされもある限い一ゆなりえともある限さあり。廉様何れふもとりおろす

将あふがちなるさまふてえんぐるしらるべきを。まして祭などをんであつまぬべし。下すだれも高くて。ろろきひとへうちくれなどしてゐめりうしたぶ生日のもとうふとて車も下すだれもたくてしいとくちをしうたあらじと出さるざふまさる車などえつけていい。何ふなどえる物をましていらべらりなる心地ふてさてえるらん。おりのぶりあつまく君ぢちの車のおしわけてちうさつ時などに心ときめきハすもふきふまとてんと急がせで。とく出てまつるどいとえしきふ。ゐたりたちあがりなど。あつくくるしくまちこうずるゐどふ。齋院のゑんゲふまゐりたる殿上人ふの衆。雜少納云など。せつやつ引つゞけてゐんのうたよりえしらせてくることそことなりふゞりとおどろろもとてうれしられ殿上人のあいひおおせふくの法ゐどもにすゐたんくをもとて。ちゞきれもとふるひきよもるふ。おゞえある人の子どもなどたゞうたきなどおまてるのくちなどしてをうし。ちらぬものいえといれらきぬなどぞいとほしげなる。法こしのわたらせぬへバ。すゞれもある限どりれるしるさせぬひぬるふ。まどひなぐるもをうし。生まへふたてる車

い敬礼の儀なるべし。
いひらつらひて、下人を制しうねて主人ふ消息しそこと云る也。

ひとたまひ、副車をいふ。出車ともいふ。公方より点せられて其人ふ給ふ故ふ人給と名付くる也。ある方ハ見物をべき所のある方のを也。
ひなびあやしくい、車の主人のをめや

をいみどうせいまるふなどてたつまどきぞと
をひてさつれバ、いひわづらひてせうそこなど
することをうしろめたく、ふもなくちかさなりた
るふよきふのは車人だまひむきつぎておろく
くるをいづくふたゝんとえるふどふ。ふおども
只おりふおりて、さてる車どもをさゞのけふの
けさせて、人ふひつゞきてたてるこそいとめで
たけれ。おひのけられたるえせぐるまどもうし
うけてふあるうさふゆるぐしもてゆくなどい
とゞびしげなり。きらくをきなどをバえさしも
おしひしぐぞかしいときよげふれど又ひなび

うならぬさまを也。

ゑそとめふ云くハ、清少納言の廊の局ふ忍ひてとまりうし人雨ふる曉ふ帰りしとて人々沙汰せをかるゑ。
地下ハ昇殿せざる人をいふ也。

大うさハ蓋ふて笠の柄のあるをいふ。
みうさ山ハ、后宮の御連歌ふて彼笠さ

あやをく、げもさえずよび、よせ、ちご出しをる
などするもあるぞうし。

大げさ

百八十九段

細殿ふ便なき人なん、曉ふ笠さゝせて出けると
言出たるを、よく聞けバ、我ふ也けり。地下などい
ひても、めやをくく人ふ許さをぬなどうの人ふもあ
らざめるをあやしのるやとゑふゑどふうへふ
りは文もてきて返事只今とれゑせられさり。何
事ふうとゑひて見るバ、大げされうたをかきて、
人ハこゝんぞ、只ふまれうぎり笠をとらへさせて下ふ
みうさ山やまれをあらしはしたうり

させて出たる歌よりさもくの沙汰ある事を仰せられしなるべし。

雨あらぬ名のい清少納言の付句也。らる浮名の世よふりて后宮ふまそて志られ参らせし恥しさよこのさなるべし。

とかゝせゐつり。なほをうなきるすふてもめでたくのミおがえさせゐふふをづ〻〻く心づきなかきるハいゝでゐらんぜらをどとおもふふさるそらでとなどの出くるこそくるゝ〻れとをゝ〻うて。こと紙ふ雨をいゝどうふらせて志もふ。

雨ならぬ名のふりふけるゝふ

さてやぬをきぬふい佐らんとけいゝたれバ。右近内侍などふかゝらせゐひてわらえせさまひゝり。

あをざし

百九十段

さうふのこしい菖蒲輿禁ゞへ奉るを后宮へもまゐらせたるなるべし。

まざゝしい菓子なり。麦の米熟するを煎りて後皮とさり。そを臼ふひきて調するものなり。

ませこゝふ麦いゝ麦といふ志也。万葉集ふませこゝふ麦くむ駒のゝらるれと猶も恋ゝく思ひうてぬをとあとハなり。又万歳抄云。あとをさしい野度なるものふれハ。唯ませこゝふ

三条の宮ふおをしまをは五日のさうぶれこゝあどもちてまゐりくもむまゐらきなどわゝきゝくみくゝげどのなどくもむゝて。姫ゝやわゝ宮つけさせ奉ゐいとをゝゝき糸むかゝゝりもまゐらをたるふあをざゝといふものを人のもてきたるを書きさうすゆうを艶ふるすゞ是れふたふをきて。これまませゞゝふさぶらへべとてまゐらせたれバ。

皆人い花やてふやといそぐ日もわがこゝろをバ君ぞたりゐる。

と紙のをゝを引やるて。ゝ〻せゐへるも。いとめ

所覧ずさまる近ふ奉るとのこと也今の世も貴人ふ物奉るハ。内司ふ調るなといへるふ同じとあり。濱臣云。さふらへハ。濱臣云。さふらへとととてとありなし。

皆人ハ云々ハ。人々いそぎをして色々細工をいそく端午の日も清少納言ハ我心をもりて菖蒲を選せしは満足也と感れ給へるなり。髪をゆいこしてハ。髪を首のおとより前へ打こしてをふとうなる也。

あさらしきそとハふいとよくもハ。一本ふ。あさらしきそでたし。

ゆげひのすけ　百九十一段

十月十餘日の月いとあかきふなりきて物ゝんとて。女房十五六人ばかり皆こき紀ぬをうへよきて。引ろくしつゝ。ゑし中に。中納言の君の名の張たるをきて。くびより髪をかいこしのへりしろバ。あさらしきそとバふ。いとよくもふさはし。ゆげひのすけとぞわらき人ぐいつけたりし。ふりふたちてわらふもをらぞろし。

宿住北中將　百九十二段

成信の中將こそ。人の髪ハいとどうゝ多ちりぬひしろ。おなじふの人の髪なとハ常ふきらぬ人ハ。更ふえきゝわらぎ。ことゝ男ハ人のこゑをも。多をも見わき分ぬ物をいみどうみそうなるもおしこうきゝわきぬひしこそ。

大藏卿　百九十三段

大藏卿ばかりみゝとき人ふ。御ふ蚊の睫のおつるをおども少付ぬひつべくこそゑしろ。職の法ざうしの西おもてふ住し北。大殿の四位少將とぬいふふ。そばにある人。此少將ふ扇の色はゑいへとちゝめけバ。今彼君さちぬひなんふをとみそうふいひいるゝを。女人ざふえきゝつけで。何

彼君さち給ひなんふをい。大藏卿立給ひたらん。語らんと耳語せし也。

とてよくもとあり。濱臣云。一本ふてよくゑえさりさてよくも似たりしろふハ。下のゆけひのすけといふへろうれり。上文ふけなきものゆけひのすけのやかうとあり。西宮記ふ西陣多勤夜行とあり。月釈ふかいこせる髪の。報負佐の夜行の姿ふ似通へるをいへり。かいこせる髪の報の形見ゆる也。

五人とふハ、彼扇の骨いひ一人をいふ。
をとうちていハ、大殿御のきいつけ給ひて也。

らう多きハ、労多きふて久しくつらうれ一ことも。
さゝしハ、今いふ墨たさみてつらふをいふ也。
おきくちのをさめハ、濃長元今いふいつめけふて硯箱のうとの上の方のをさまふ塵のあるをいふ也。

とうゝとゝゝをかゝぶくるゝををうちて、ふくゝさのあハゞ、ふをさゝゞとのあふこそいうでゆめひつらんとあさましうまゝしう。

硯　百九十四段

硯きたふげふ塵ゞゝ墨のうゝさつうたふちどけなくすゝひらめうゝらうおゝきふ紙たるゞちさしなどゝたるこそ心もとふゝと覚ゆゝ筆のてうどいさる拍子て、女ハ鏡硯こそ心のほどゝゝゆるなめれ、おきゝぐちのをざめゝ塵ゐなど打捨たる様こふなゝうし男ハまゝてふづくゝゐきゝゝげふおゝのごひて重ねならずバふゝつうけごの硯のいとつきゞちうまきゐのさまもゝざとならねどをうゝうて墨筆れさまなども人のめとむバうりちゝてたるこそをうゝれどあれどかゝれどおなじゐとそくろをこれふゝもかたゝおちたる硯わづうふすみのゐゝるちりの世ふハちうひゞゝげなるふ水うちなゞゝて、あをゝのうめれ口おちて、びのかぎりあふれ程ゝえて人ゝるきなども、つれなく人の多ふちゝ出づうゝ人の硯を引ゝせて手習ひをも文をもかくふ其筆なつうひあひそといをれたらんこそいとわびゝうるべゝれうちおうんも人わ

重ねハ重硯也。

とあれと云ゝハ、硯なとゝふくてもあゝくても物うけハ同しゐとのゝ也。
くろをこのハ、蒔繪もなく唯黒塗の箱をいふ也。
あをゝのうめハ、青磁の水入の亀の形なるをいふ。

さ覚るもちりたれいえさやうふ迷惑なるも思ひよりたれハ人の我筆をつゝふをもいとて見るふとの意也、水ぢちふハ濵ほ云墨を多くふくませたるこゝをいふ也、こいものやゐりハ、あとなしゐをめたと書付たるさまにやゐ万歳抄云こゝもものやゝりとゐなまほそひつのふさゐとふまてこれハ物や遣戸ゐ何やほそひつのふさなど云云の意なりとあれと猶たしゐあらぬさいゐんやゐハ筆を要くつゐひなに

ろし、程つゐふもあやふく也、さ覚るゐもちりさきバ人のをるもいゐでゐるふ、をなどふくをあらぬ人のちすゞふ物ゐゝまゐしうするハいとよくつゐひかゐめたる筆を、あやしのやうふゐがちふさしぬらして、こいものやゐりとかなにゐそびつのふさなどにゐきちらして、よこざまふなげおきたれバ、ゐふかしらハさしいれてふせるもふくきゐぞゐし、されどちいゐんやゐ、

あうふり給へ　百九十五段

人のまへふゐさるふ、あふくらあうふりさまへといひたるこゐ又わびしゐれ、さしのぞきたるをのそきたるも思ふ人の事ゐをあらぼかし

文といふもの　百九十六段

めづらしういふべきゐふハあらねど、文こそ程ゐんでたき物なれ、ゐなるゐなるせゐいふちゐ人のいゐゝどくおぼつゐなくいゐならんとおもふふ、文をみをを只今さしむゐひたるやうふおぼゆるいゐゝどきゐなりゐし我ゐふゐを云やりつをバ、あしこまでも行つゐざるらめど、こゐゐゆくこゐちこそすれ、文といふ物ならましゐバ、いゐふいぶせくくれふさげる心ちせまし、ふゐつのゐるひくて、を人のをとへとてこまぐとゐきて

とてなつゐひそとともいふへきゐあらぬハとも、

あうふり給へハ、奥へふり給へのを也いゐれたるもハ人の見付て驚きて咎めたるゐ佗しゐめさせ、さるハつねの人の上なり、思ふ人ふとゐめられたる折ふハあらすと也、

をるゐなる世界ハ遠方の國の意也、あしこハ、彼處の意也、

くれ、ふさゐるハ、目くを胸ふさゐるの意也、

おきつれぞ。おぞつゝ赤さをもあぐさむこゝちもするふまして返るゑつれバ。命をのぶべゝめる。

ぐふことゝりふや。

うまやハ　百九十七段

なしたゝら。ひぐれのうまや。もち月のうまや。

けぐちのうまや。山のうまや。あはれなるゑをきゝおきたゝらしよ。又あゝれなるゑのありしかぞ。猶とりあつめてなはれゝおぞゆるなり。

岡ハ　百九十八段

ふふをゝ。かゝとをゝ。ゝもをゝハ。ちゝのおひけふことゝりふやハ。文をめてさき物といふハ理也とのの意なり。

うまやハ駅ふて今の馬次宿々也。

鞆岡ハさゝのハ。神樂歌ふ此笹ハいつこのさゝそとぬりらゝこゝふさゝれるとゝもをりの笹とあるをいへる也。

すぎのゝ社ハ三輪をいふまやゝゝるゝの杉といへる下の河思ふべし。

いとゝとのゝハ。社の名。いふすのまゝふ願かなふべきやうなれハなるべし。

ねぎゝをゝを云くハ。古今集ふ。ねぎことをさのみきゝけん社こそそそハ歎の森となゝなゝとあるをいふ也。

たるゞをゝこゝきさ也。かゝとらひれをゝ。人見のをゝ。

やゝろハ　百九十九段

ふるのやゝろ　いくたの社。さつたれやゝ張。

をふふちのやゝろ。みくりのやゝろ。すぎのゝ社。ゝるゝゝらんとをゝこゝ。ことのまゝれ明神。いとたのもゝ。ゝのゝきゝゝゝんとやいそれあハんとおもふぞいとをゝこゝき。あまゝどゝこゝの明神貫之ゞるれわゞらひけるふ。ゝゝ明神のやませあふとそ。歌よみて幸ゝんふ。やゝあひけんいとをゝこゝ。ゝはありどゝしさつけたる心ハ。孫

ふやあらん。むらしおハしましける帝の。只若き人をのみおぼしめして。四十ふ余ぬるをバ。うしなはせぬひとれバ。人の國ゝとほきふいきかくれゐどして。文ふ故のうちふ物なりける。ふ中物なりける人の。いみじき時の人ふて。心なども賢ゝりけるゞ。せそぢちゝき程ふゝりをもたりけるゞ。かう四十をゞふせいあるふ。まして。いとわそろしとおぢはゞぐを。いミどうけうある人ふて。とゞきふよハ更ふもませず。一日ふ一度見でいえあるまゞとて。みそろよるゝ家の内れ土をゝりて。そうちふ屋をたてゝ。それふこゆも

せいあるふハ。制ふて法度也。

けうあるハ。孝行なる也。

なとてゝ云ゝハ。なとてゝさまて制し給ふらん。老人の出つゝへんをこそきらひ給へ。家内ふ居さらんハたゝてもおゝえせよゝとの意也。

時の人ふおふすハ。帝の心ふも此中將を當時の賢良とおゝしたりとの意也

思て。いきつゝ見る。おゝやけふも人よもうせゝくれたるふしをたゝらせてゝりゝなどてゝ。家ふ入給たらん人をバしらでもおハせかし。うたてあ里ゝる世ふこそ。おやハ上達部などよやゝゝん。中將ふゝ子よてもたりゝんハ。いと心ゝしこく第の二ふ志りたりゝれバ。此中將ゝゝゝゝどざえあ里いゝより賢くた。て時の人ふおぼゆ也ゝゝ。もろこしの帝。これ國のみゝどを。いゝでたゝりて。此國うちとらんとて。常ふ心ゝあらがひゝを志ておくりゝゝひゝるふ。つゝやゝとまろふうつくしげふゝづりゝる木の二尺バゝりあるを。これゞ

すべてあるべきやうなしい、此國人何れも若くて分別かかりし故なるべし。

只そやらん川ふい、老父の教ふる詞なり。

もと来いづらたぞととひ奉たるふ、すべてあるべきやうなるれば、帝おぼしめしわづらひさるふいとほしくて、おやのもとふゆきて、かうくのるなんあるといへば、只そやらん川ふさちかぐらよこざまふふげ入えんふかへりてあぐれむったをすゑとあるしてつういせとをしふまるりて我志りがふして、心えぬ侍らんとて、くぐしてなげいれたるふ、ちきふしてかかさふ志るしをつけてつういしたれば、まことふちかりり、又二尺ばかりなるくちなハのおなじやうなるを、是ハいづれら男女とて奉れ給、又ちらふ

二つをならへてい、赤老父の教ふる詞也。

をえたららさんい、尾を動さんをなり。

七ヨさハ、七曲也、定のまらりとわりしなり。

人えあらぜれいの中ゆきてとへば、二つをならべて尾のうたふかそきぜハえをちしよせんふをたさらうさんをめとしとといひけるば、やがてそれを四重のうちまてさしくれば、まことふ一つをうごうさず、一つをうごうけるふ、又ある一つけてつういしりり、往久しうて、せわざふヨざうまりたる玉の中とぼりてだたふいあきたるがちひちきを奉て、これふをとぼしてたまハらん、此國ふみ方志佐るるなりとて奉て、さるふいみドうらん物の上ふふようならん、そこらの山道ふ分ようをしめて、ありとある人ちら

おかきなる蟻をば。亦老父の何也。

びといふふ。又いきてかくなんといへば。おかきなるありを二つとらへて。こゝふかそき糸をつけ。又それふ今まこゝふときをつけて。あなゝのこゝろをぬりて。其香をきるへふ蟻のゆくへきゝためせ。

口ふみつをぬりてえんとといひければ。さ申て。あるをいきてさりけるふえ門の香をかぎて。まことふいとこうばしあなたのくちふ出ふゝり。はてゝ糸のつらぬられさるをつゝいゝたりけるはふなん。怪日本ハゝこかりゝりとて。のちゝハさるゆもせざりゝり。此申物をいゝゝき人ふおゞゝめして。何ゆをゝいゝなるくらゐをゝ給たるべきとおかせられゝれば。さらふつゝさ位をも給たらじ。只老たる父母のかくれうせて侍るをとゞねて。故ふまゝまるゆをゆるさせぬへと申ゝれば。いゝゝゝやまきゆとてゆるされふゝれば。よろづの人のおやをきゝてよろこぶゆいゝゝゝりゝり。中物ハ大臣までふなさせ給ひてなんありける。さて人の神ふなりたるふやあらん。此物神のもとへまうでたりゝる人ふよるならハれてのさまひける。

なゝわゝふまがれるゆのをゝぬきてありとほゝとも云ふらぞやなるらん

とのゆひゝるとと人のゝたりゝ。

老たる父母のハ。唯中物の我父母のゆをいふふあらすゆ。べて世人の父母をゆるされんゆをいへるなるべし。

ふるものハ　二百段

雪。あられ。みぞれハふくるれど。雪ハ。ひたぶるぶきいとめでたし。すこしきえぐさふなりたるわど。又いとおかしうハふらぬが。かいらのめごとふ入てくろうましろふんえたるいとをかし。たぐれ。あられハいとや。霜も板屋。庵。

日ハ　二百一段

入日。いりてぬる山ぎハふ。ひかりの残とまりてあかうてゆるふ。うもきバみさる雲れさかびきたる。いとあハれなり。

ひたぶるぶきいとめてたしハ檜皮葺ふふりたるをおもしろしとの意也。

かいらのめごとハ。九尾の狐をいふなり。

うすきえみハ。薄く黄みさる色の也。

月ハ　二百三段

ふ。ぬ。東れ山のをふ。ぬそうて出る程哀也

星ハ　二百四段

すバる。ひこぼし。みやうおやう。夕つゞ。よバひぼしをざふふらまーろべ。まーて。

雲ハ　二百五段

白ろき。むらさき。くろきもをかし。風吹ぬのあま雲。ぬをふる〜わどのくろき雲の。やう〜白ろうなりゆくもいとをかし。紫ふさる色とかや。ふ〜ふもつくりそう。月のいとあかき面ふ。薄き雲いと哀也。

すバるハ。昴星也。みやうしやうハ。明星ふて和名抄ふハあかぼし〜洲り。夕つゝハ長庚ふて大白星の一名也。よばひぼしハ。流星也。星ふもちゝる名をきへつゝすハとをさをふれたる也。くろきもをかしハ。一本ふ黒き雲哀也とあり。

標註枕草紙讀本卷四終